

群馬大学キャンパスマスタープラン 2011



国立大学法人 群馬大学
National University Corporation Gunma University

目次

1. キャンパスマスタープラン2011について	
(1) 本学の基本理念・目標	1
(2) キャンパスマスタープラン2011の基本理念	2
2. キャンパスマスタープラン2011の基本方針	
◇ 教育・研究機能の高度化など地域の知の拠点としての施設整備	3
◇ 医療の高度化や地域医療の拠点にふさわしい施設整備	3
◇ 産学連携など地域貢献の推進のための施設整備	3
◇ 世界に卓越する先端的・独創的な研究拠点としての施設整備	3
◇ 地球環境に配慮したサステナブルな施設整備	3
◇ 個性豊かで魅力にあふれたキャンパス環境を実現する施設整備	3
◇ 安全・安心な教育研究環境を確保する施設整備	3
3. 施設配置計画（ゾーニングプラン）等の考え方	
(1) 施設配置計画（ゾーニングプラン）策定上の基本視点	4
(2) 施設配置計画（ゾーニングプラン）策定上の基本方針	4
4. 各キャンパス毎のマスタープラン	
4-1 荒牧キャンパス	
(1) 敷地利用計画（ゾーニング・施設整備）	5
(2) 動線計画（駐車場・駐輪場計画を含む）	6
(3) 緑地計画（広場等）	7
4-2 昭和キャンパス	
(1) 敷地利用計画（ゾーニング・施設整備）	8
(2) 動線計画（駐車場・駐輪場計画を含む）	9
(3) 緑地計画（広場等）	10
4-3 桐生キャンパス	
(1) 敷地利用計画（ゾーニング・施設整備）	11
(2) 動線計画（駐車場・駐輪場計画を含む）	12
(3) 緑地計画（広場等）	13
5. 各キャンパスの現状と課題	
5-1 荒牧キャンパス	
(1) キャンパス環境	14
(2) キャンパス整備の経緯	14
(3) 耐震・老朽状況	15
(4) 施設整備状況	15
(5) 屋外環境整備	16
(6) インフラ整備	17,18
(7) エネルギー使用量	19
5-2 昭和キャンパス	
(1) キャンパス環境	20
(2) キャンパス整備の経緯	20
(3) 耐震・老朽状況	21
(4) 施設整備状況	21
(5) 屋外環境整備	22
(6) インフラ整備	23,24
(7) エネルギー使用量	25
5-3 桐生キャンパス	
(1) キャンパス環境	26
(2) キャンパス整備の経緯	26
(3) 耐震・老朽状況	27
(4) 施設整備状況	27
(5) 屋外環境整備	28
(6) インフラ整備	29,30
(7) エネルギー使用量	31
6. 第I期中期目標・中期計画期間の施設整備	
(1) 荒牧キャンパス・昭和キャンパス	32
(2) 桐生キャンパス・若宮キャンパス	33
検討経緯・制作	34



（1）本学の基本理念・目標

基本理念

本学は、北関東を代表する総合大学として、知の探求、伝承、実証の拠点として、次世代を担う豊かな教養と高度な専門性を持った人材を育成すること、先端的かつ世界水準の学術研究を推進すること、そして、地域社会から世界にまで開かれた大学として社会に貢献することを基本理念とする。



桐生キャンパス 同窓記念会館



荒牧キャンパス 総合情報メディアセンター図書館



昭和キャンパス 刀城会館

基本目標

教育

- 1) 教養教育、学部専門教育、大学院教育を通じて、豊かな人間性を備え、広い視野と探求心を持ち、基礎知識に裏打ちされた深い専門性を有する人材を育成する。
- 2) 学生の勉学を促進する学習環境と支援体制を整備する。

研究

- 1) 各専門分野で独創的な研究を展開する。とりわけ重点研究領域において国内外の大学・研究機関と連携して先端的研究を推進し、国際的な研究・人材育成の拠点を形成する。
- 2) 基礎的研究と応用的、実践的研究との融合を図り、産業界や自治体等との共同研究・共同事業を推進する。

社会貢献

- 1) 地域の知の拠点として、学内外関係機関との連携した活動を通じて文化を育み、豊かな地域社会を創るために活動する。
- 2) 知の地域社会への還元を推進し、産業発展に貢献する。
- 3) 地域医療を担う中核として、医療福祉を向上させる。
- 4) 地域住民の多様な学習意欲や技術開発ニーズに応え、地域社会の活性化に貢献する。

大学運営

- 1) 学長のリーダーシップの下で経営戦略を明確にし、教職員の能力を引き出し、自主性・自律性を持って効率的な大学運営に当たる。
- 2) 学内での情報の共有化と社会に対する情報発信を促進する。
- 3) 不断の点検・評価と改革を推進し、大学の活力を維持発展させる。

【群馬大学保管の埋蔵文化財】



- 時代：5世紀後半
- 出土地：太田市鶴山古墳
- 寸法：高さ44.0cm(短甲)



- 時代：6世紀中ごろ
- 出土地：榛東村高塚古墳
- 寸法：高さ102.0cm



- 時代：弥生時代中期
- 出土地：前橋市荒口前原遺跡
- 寸法：高さ22.5cm

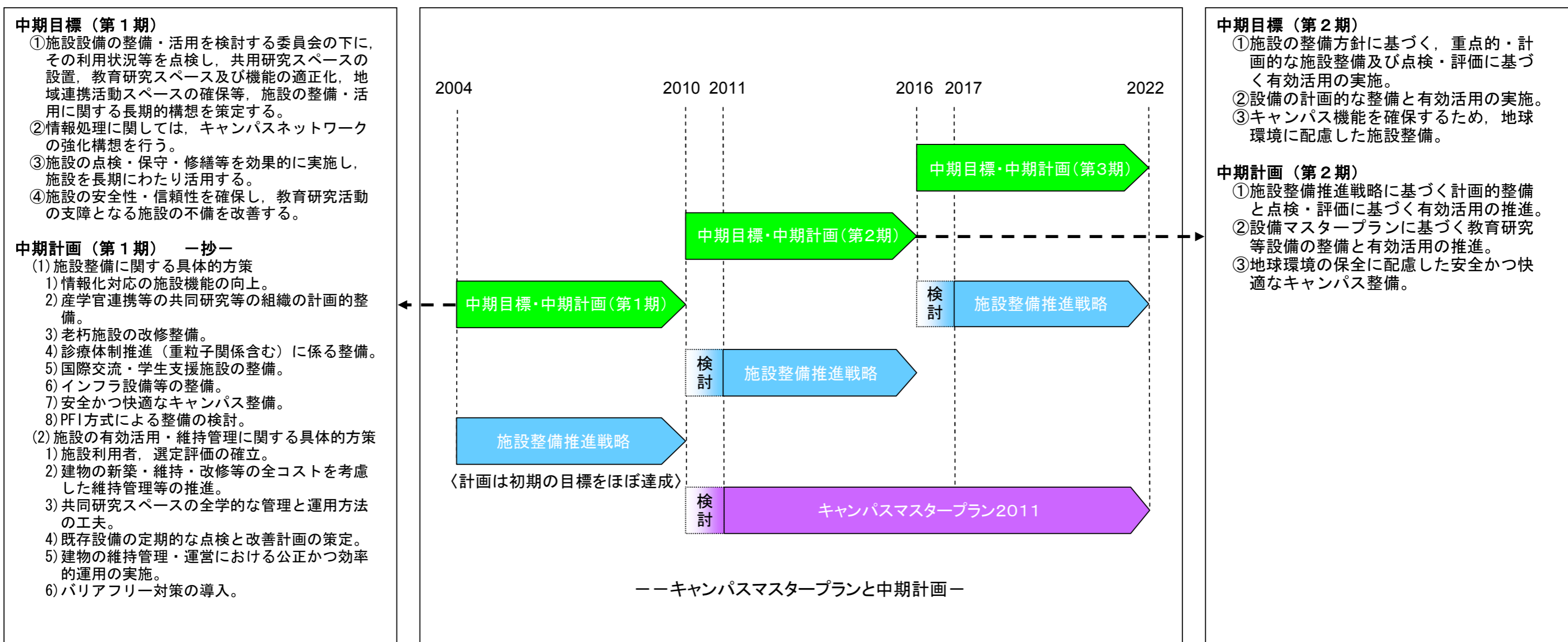
1. キャンパスマスタープラン2011について

(2) キャンパスマスタープラン2011の基本理念

本学の基本理念及び目標を具現化するためには、従来の施設の整備を主体とした計画である「施設整備推進戦略」の基本となる方向性、すなわち中期目標・中期計画、アカデミックプラン及び経営戦略を踏まえた、キャンパス整備の基本方針を明確化するとともに、施設マネジメントや施設ストックの質の向上までも視野に入れたキャンパス全体の整備・活用を図るキャンパスマスタープランを策定し、その下での計画的な施設の整備を行う必要がある。

このキャンパスマスタープランは、第2期及び第3期の中期目標・中期計画を通じた12年程度の期間を想定するものとし、これを補完するため、5年程度のアクションプランとしての施設整備推進戦略を併せて作成することとする。

なお、このキャンパスマスタープランは、「キャンパスマスタープラン2011」と称し、国の施設整備予算の措置状況や本学の財政状況のほか、本学内外の教育・研究・医療等の変化に対応させ、必要に応じ見直しを行うものとする。



国立大学は、我が国の教育及び学術研究の根幹を支え、将来にわたる社会発展の基盤の構築に寄与し、ナショナルセンター及びリージョナルセンターとして知の中核的拠点の役割を果たしていくことが期待されており、創造性豊かな人材を育成するとともに、先端的・独創的な学術研究の推進を通じ、我が国の社会発展や経済発展を支えるという重要な使命を有している。このため、本学の施設は、このような教育研究活動を行っていく上で極めて重要な役割を担っているだけでなく、医療の高度化、産学官連携の促進及び、様々な社会貢献等の活動を果たしていく上で、これらの活動にふさわしい機能や質的水準を備えた以下に掲げる施設として整備する必要がある。

◆ 教育・研究機能の高度化など地域の知の拠点としての施設整備

ナショナルセンター及びリージョナルセンターとして、知の中核的拠点にふさわしい研究環境を整備するとともに、我が国の社会発展を支え、国際社会をリードする人材を育成するための教育機能の充実・発展に資する施設整備を進める。

- ① 知の拠点にふさわしい教育研究環境の整備
- ② 多様な学習ニーズへの対応 など

◆ 地球環境に配慮したサステナブルな施設整備

低炭素社会、循環型社会、自然共生社会の構築に向け、環境への負荷が少ない持続的発展が可能なキャンパスの構築を目指す。

- ① 地球温暖化に対応したキャンパスづくり
- ② 省エネ活動と一体的な環境対策の推進 など

◆ 医療の高度化や地域医療の拠点にふさわしい施設整備

先端医療を推進する役割を果たすとともに、地域の中核的医療機関としての機能を担う場として、附属病院を計画的に整備する。

- ① 老朽及び狭隘施設への対応
- ② 地域医療再生計画への対応 など

◆ 個性豊かで魅力あふれたキャンパス環境を実現する施設整備

大学の顔としての学部・学科の特性や地域性、歴史や伝統を象徴する個性豊かなキャンパスづくりを進め、魅力あるキャンパス環境の整備を図る。

- ① キャンパス環境の調和、個性化
- ② キャンパスライフを支える施設の充実 など

◆ 産学連携など地域貢献の推進のための施設整備

イノベーションを創出し、産学官連携を戦略的に展開していく上で必要となる多様な形態による施設の整備に取り組む。

- ① 地方公共団体、企業等との連携・協力と多様なスペース確保の取組
- ② 産学官連携の特性への配慮 など

◆ 安全・安心な教育研究環境を確保する施設整備

安全対策・環境対策等の観点から、耐震性が劣る施設の耐震補強や安全上緊急性が高い基幹設備の更新等を図る。

- ① I s 値0.4以上0.7未満の施設の耐震化やユニバーサルデザインへの対応
- ② 基幹的な電気・機械設備（ライフライン）の整備及び安全上緊急性の高い基幹設備の更新 など

◆ 世界に卓越する先端的・独創的な研究拠点としての施設整備

国の内外を通じ卓越した先端的・独創的な研究拠点としてふさわしい施設整備を図るとともに、若手研究者の自立的な研究環境確保など施設の弾力的活用を図る。

- ① 先端的・独創的な研究拠点の整備
- ② 若手研究者の研究環境への配慮 など

（1）施設配置計画（ゾーニングプラン）策定上の基本視点

キャンパスマスタープラン2011は、中期的（12年程度想定）計画という側面を有し、かつ本学の現有敷地面積や既存施設の大幅な変更を想定するものではなく、さらに、国の財政措置や本学の自助努力等を前提としている。

したがって今回のマスタープランは、このような制約条件の下で、主として極めて大枠の施設のゾーニングプランを目指すこととし、過去における検討の所産を継承しつつ、これをリファインすることとした。

すなわち、旧国立大学時代に策定した施設長期計画（平成13・14年度策定）のゾーニングの考え方を、現状の各キャンパスの施設の配置計画に反映したゾーニングプランを土台として必要な改訂等を加えた。

（2）施設配置計画（ゾーニングプラン）策定上の基本方針

キャンパスマスタープランの基本理念や基本方針に沿い、施設配置計画（ゾーニングプラン）を策定するに当たっては、本学の各キャンパス毎に、個別のキャンパス毎の立地条件や立地施設の現状等を踏まえ、以下の観点から具体の計画を策定した。

- ① 将来を見据え、継承すべき「変えてはいけない部分」と戦略的活用を図る「変えていく部分」等を十分考慮する。
- ② 立地施設の目的・機能別にゾーニングを行うものとし、各ゾーンの構成や規模は、キャンパスの敷地面積や周辺環境等との関係における特色を踏まえつつ、これらを十分に考慮する。
- ③ 将来の教育・研究の展開を可能な限りにおいて考慮する。
- ④ 交通計画（動線、駐車スペース含む）や緑地計画も可能な限り考慮する。



荒牧キャンパス



昭和キャンパス



桐生キャンパス

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-1 荒牧キャンパス

(1) 敷地利用計画 (ゾーニング・施設整備)

【ゾーニング】

- ① ゾーニングについては平成13年度に文部科学省に提出した国立学校施設長期計画を踏襲する。
- ② 正門から入った周辺を管理共通ゾーンとし、キャンパス北側には将来構想ゾーンを設定し、一部は当面駐車場として有効活用する。
- ③ キャンパス中央部分の教育研究ゾーンには教育学部、社会情報学部及び教養教育施設が配置されており、各学部等のエクステンションはゾーニング内で対応する。
- ④ キャンパス南側には運動施設ゾーンを配置しており、西側一部(ハンドボール場)及び北側一部(馬場)を運動施設ゾーンと位置づける。

【施設整備】

- ① 耐震性の劣る建物(IS値=0.4以上0.7以下)については、計画的に適切な手法による耐震補強を実施する。
- ② 老朽建物(築後25年を経過)及び狭隘建物については、現状を把握し、適切な老朽及び狭隘改善のための措置を検討する。
- ③ サイン計画については統一したデザインにて見直しを行う。

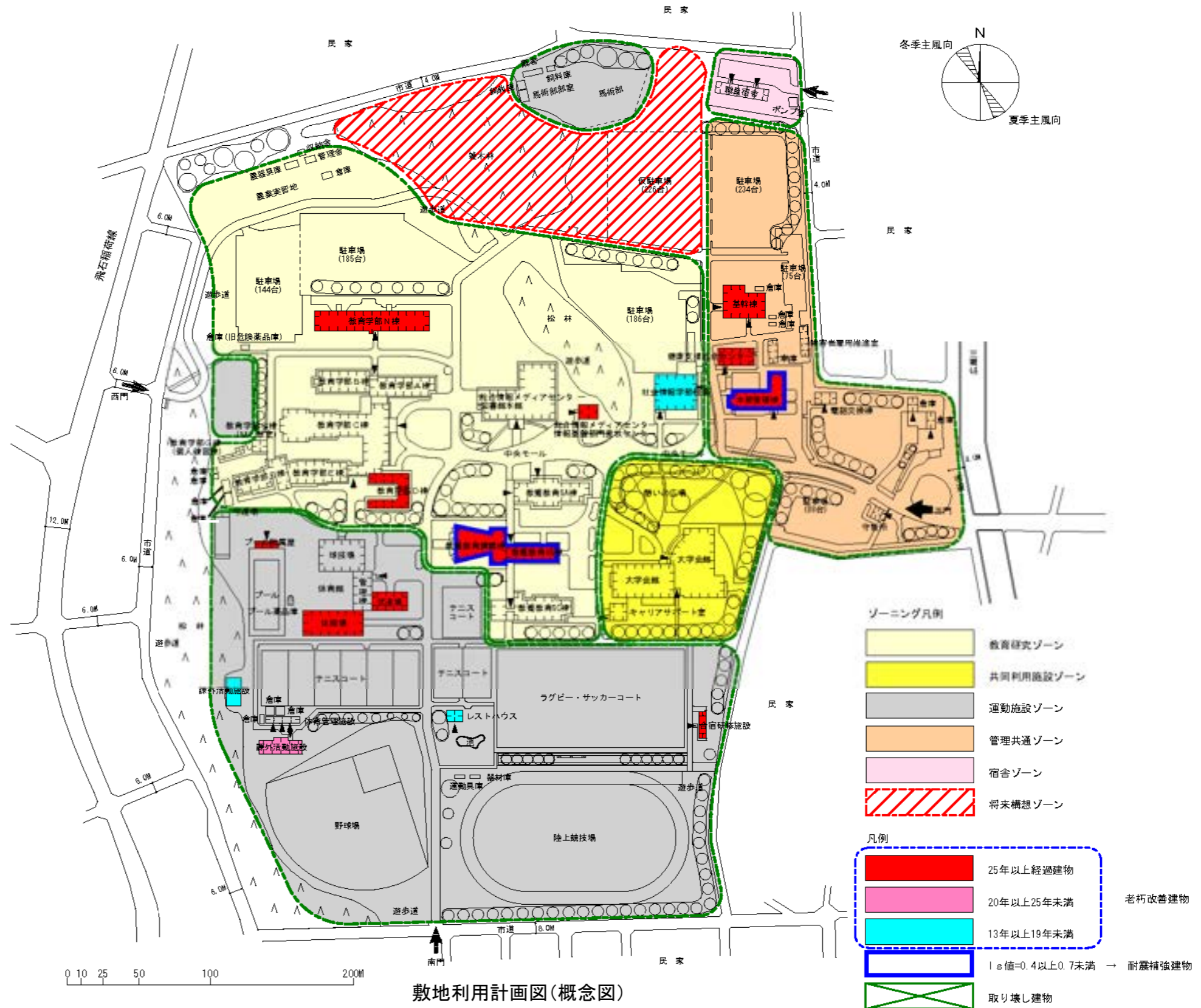
記念碑



石原和三郎先生記念碑 「兎と亀」の一節が刻まれている



井上武士先生記念碑 「うみ」の音符の一節



敷地利用計画図(概念図)

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-1 荒牧キャンパス

(2) 動線計画 (駐車場・駐輪場計画を含む)

【動線計画】

- ① 車の主動線は正門から西門へと通過する動線であり、他は副動線として位置づける。
- ② 主動線の北側駐車場の交差点及び西門からの出口には、交通安全の観点から速度を規制するためのハンプ等を設置する。
- ③ 北側仮駐車場から主動線への割り込みを禁止するため、車止めを整備する。
- ④ 社会情報学部駐車場から中央モールへの小道は駐車場を利用した学生・教職員の歩行動線として環境整備する。
- ⑤ 大学会館北側の憩いの広場を縦断している歩道については、歩行者がゆとりを持って通行できるように拡幅する。
- ⑥ 教養教育GB棟周辺に新たに駐輪場を整備する。



社会情報学部駐車場から中央モール迄の小道



北側仮駐車場から主動線への割り込みを禁止するための車止めを設置。



構内ハンプの例



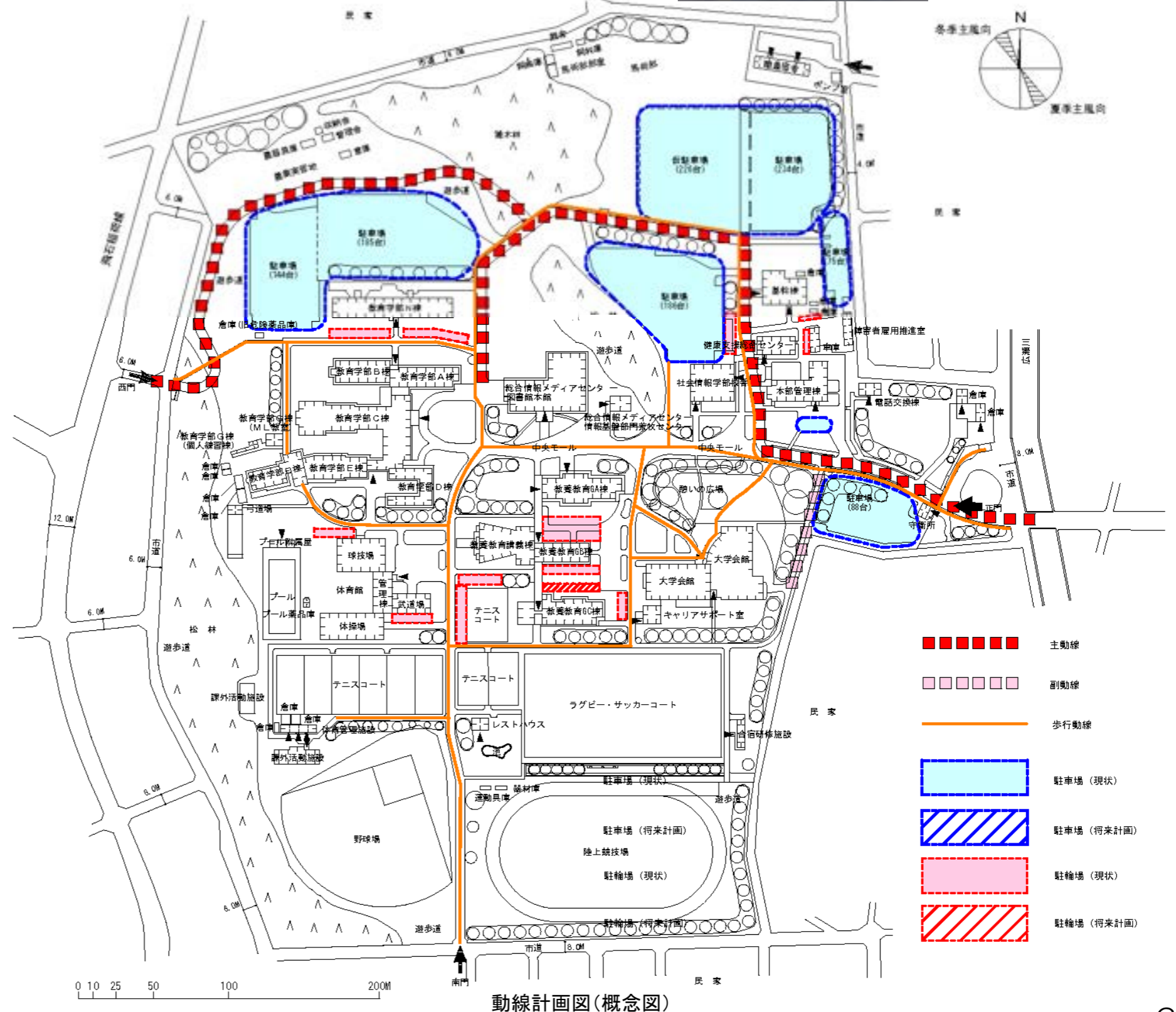
西門出口



北側駐車場交差点



GB棟駐輪場再整備



4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-1 荒牧キャンパス

(3) 緑地計画 (広場等)

【緑地計画】

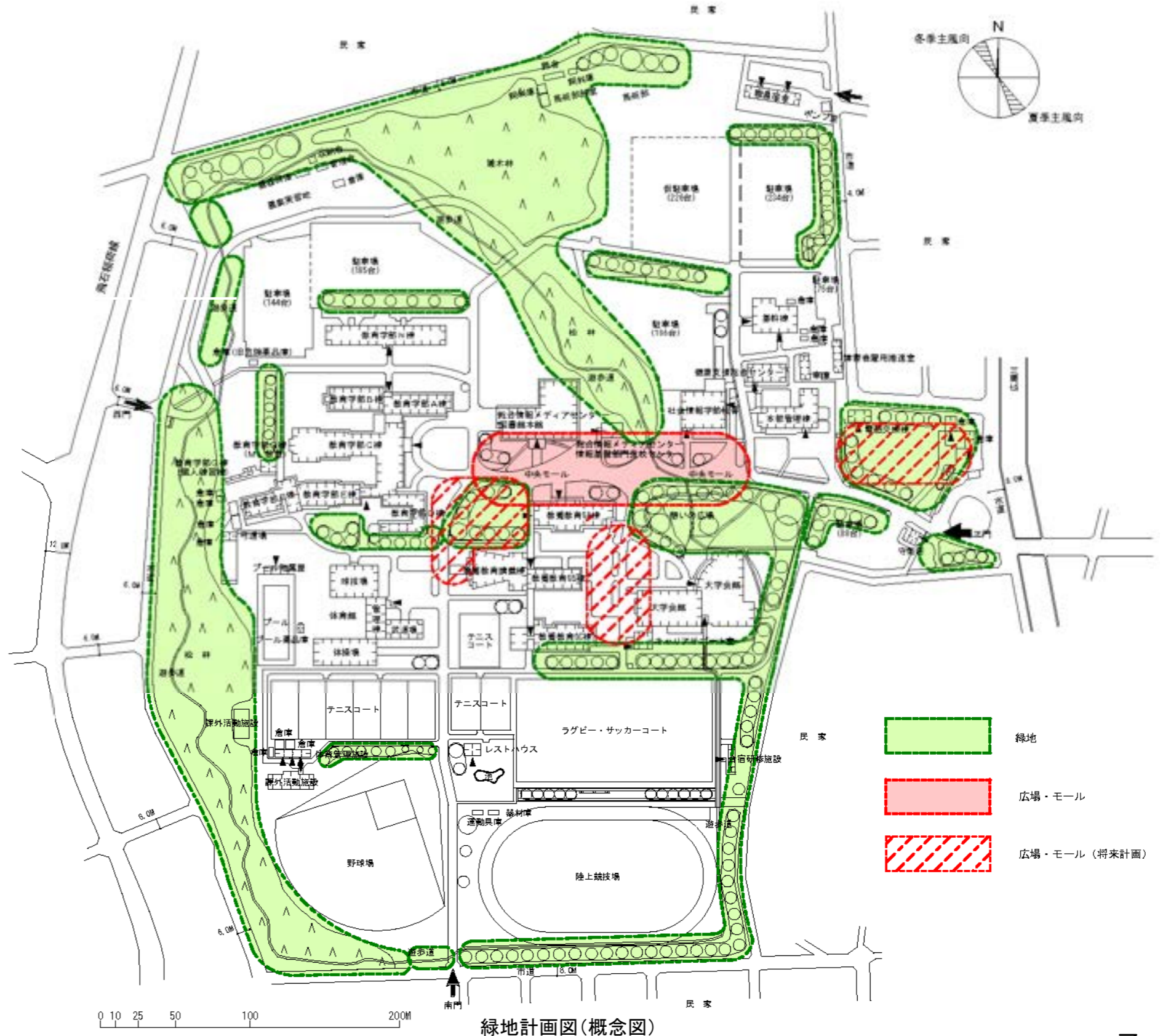
- ① キャンパス周辺の雑木林については、環境保全のための緑地として扱い、その他建物周辺の緑地については修景緑地として定期的な維持管理を実施する。
- ② 環境保全のための緑地については、定期的の下笹刈り等を実施すると共に、外来樹種の刈り取り駆除を適宜行う。
- ③ キャンパス中央部の松林については、一般管理の緑地として扱い、松枯れの予防等に努めるとともに、コナラ・シラカシなどの地域の普通種を植樹していく。
- ④ 野球場及び陸上競技場の南側には、キャンパス周辺に対する防砂的な目的から、遊歩道の北側に植樹を行う。
- ⑤ 北側雑木林と西側雑木林の中間部を植樹して一体化した緑地を整備する。

【広場】

- ① 正門から入って直ぐ右側のスペースは多目的広場として有効活用を行う。
- ② 教養教育GB棟周辺については、荒牧キャンパス中央モール整備基本計画に基づき、学生が憩う広場等を整備する。
- ③ キャンパス西側の彫刻の広場については、定期的に草刈り等の維持管理を実施する。



彫刻の広場



緑地計画図(概念図)

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-2 昭和キャンパス

(1) 敷地利用計画 (ゾーニング・施設整備)

【ゾーニング】

- ① ゾーニングについては平成14年度に文部科学省に提出した国立学校施設長期計画を踏襲する。
- ② キャンパスの教育研究ゾーンと共同施設ゾーンの見直しを行い、北側及び西側の一部を将来構想ゾーンとして設定する。
ただし、当面は駐車場として有効活用する。
- ③ 医学系研究科、保健学研究科及び共同利用施設等のエクステンションは各ゾーニング内で対応する。

【施設整備】

- ① 耐震性の劣る建物(IS値=0.4以上0.7以下)については、計画的に適切な手法による耐震補強を実施する。
- ② 老朽建物(築後25年を経過)及び狭隘建物については、現状を把握し、適切な老朽及び狭隘改善のための措置を検討する。
特に外来診療棟及び南病棟については、改修時期を含めた基本計画作成の検討を始めるとともに、その際には、県からの補助金等に伴う施設整備についても考慮する。
- ③ 老朽化し、将来不要となる建物(旧手術部棟、旧特高受電室及び医学部基幹棟)については、取り壊し時期を検討する。
- ④ サイン計画については統一したデザインにて見直しを行う。



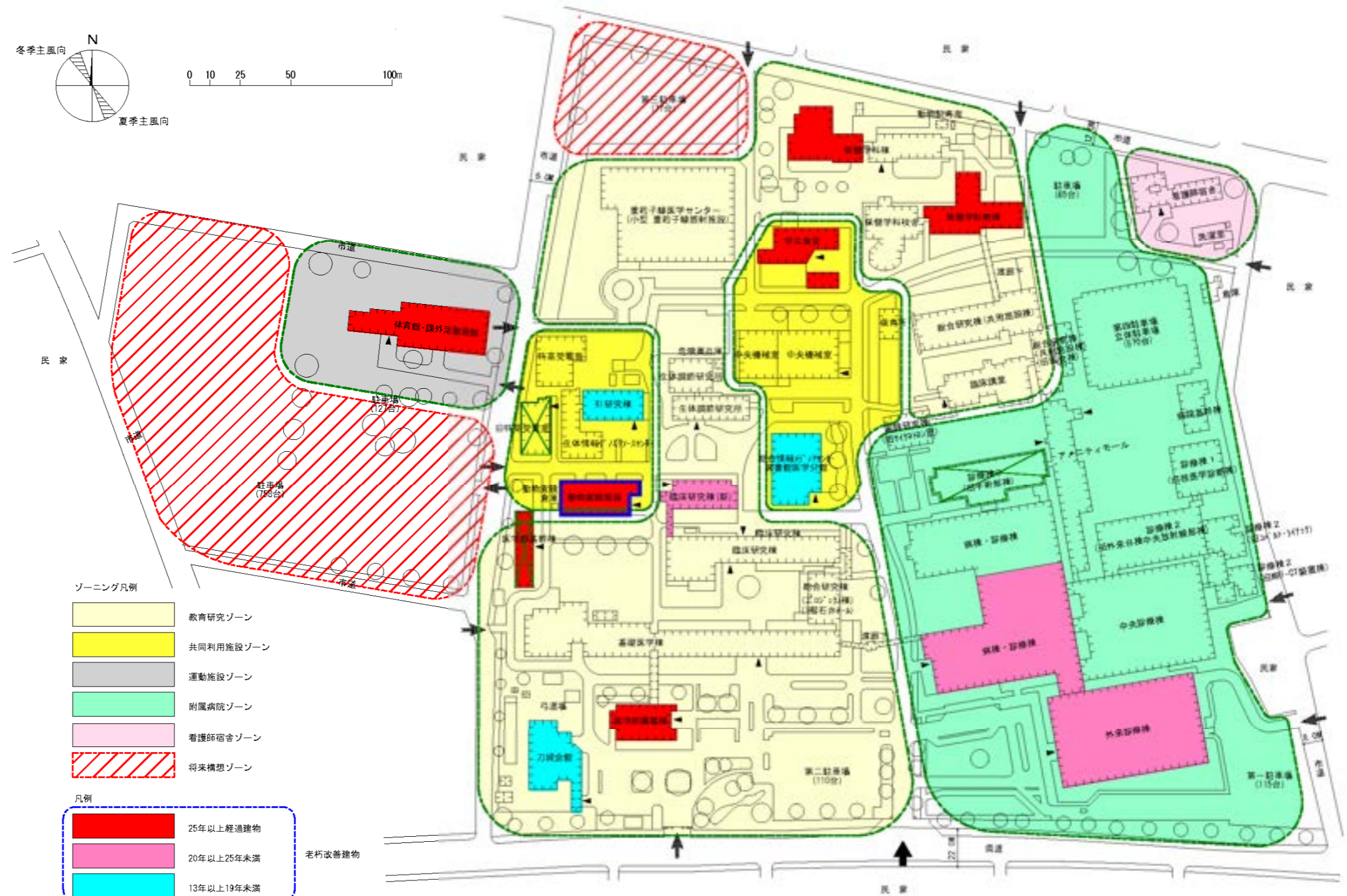
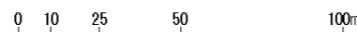
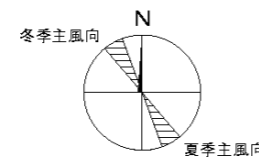
刀城会館(寄付建物)



石井ホール(寄付)



アメニティモール(事業用借地権)



取り壊し予定建物



医学部基幹棟



旧特高受電室



旧手術部棟

ゾーニング凡例

- 教育研究ゾーン
- 共同利用施設ゾーン
- 運動施設ゾーン
- 附属病院ゾーン
- 看護師宿舎ゾーン
- 将来構想ゾーン

凡例

- 25年以上経過建物
- 20年以上25年未満 老朽改善建物
- 13年以上19年未満
- IS値=0.4以上0.7未満 耐震補強建物
- 取り壊し建物

敷地利用計画図(概念図)

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-2 昭和キャンパス

(2) 動線計画 (駐車場・駐輪場計画を含む)

【動線計画】

- ① 車主動線は正門から一方通行で入構し、外来患者の車両と一般車両が並行し渋滞状況となっているため、キャンパス内の交通動線の検討を行う。
- ② 教職員の通行動線として、動物実験施設付近の車道が狭隘なため、老朽建物の取り壊しを含めた道路整備の見直しを行う。
- ③ 外来患者及び教職員の駐車場が不足しているため、駐車場の確保の検討を行う。



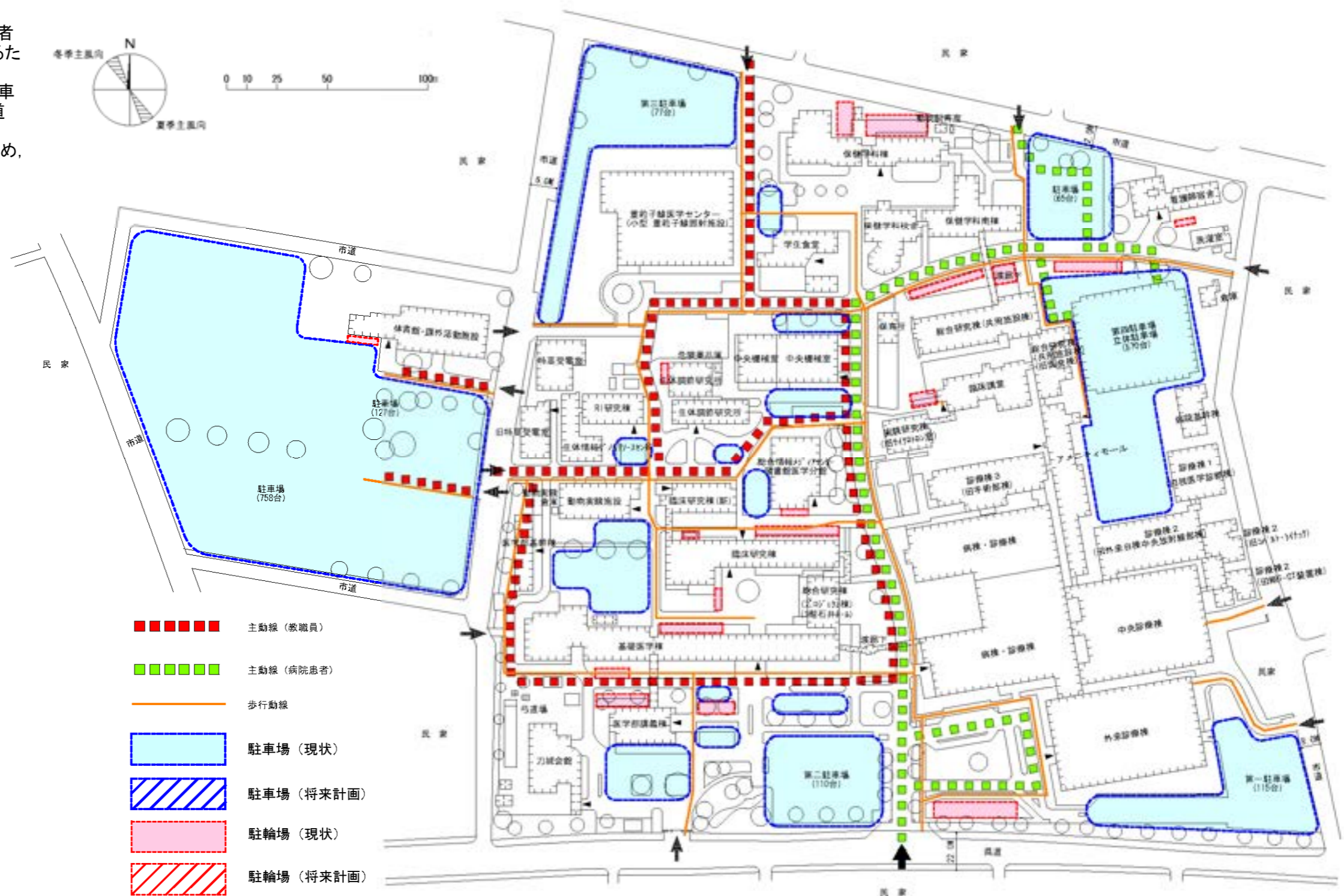
外来者専用立体駐車場



教職員用駐車場



正門付近混雑状況



動線計画図(概念図)

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-2 昭和キャンパス

(3) 緑地計画 (広場等)

【緑地計画】

① キャンパス内の建物周辺の緑地については、修景緑地として定期的な維持管理を実施する。



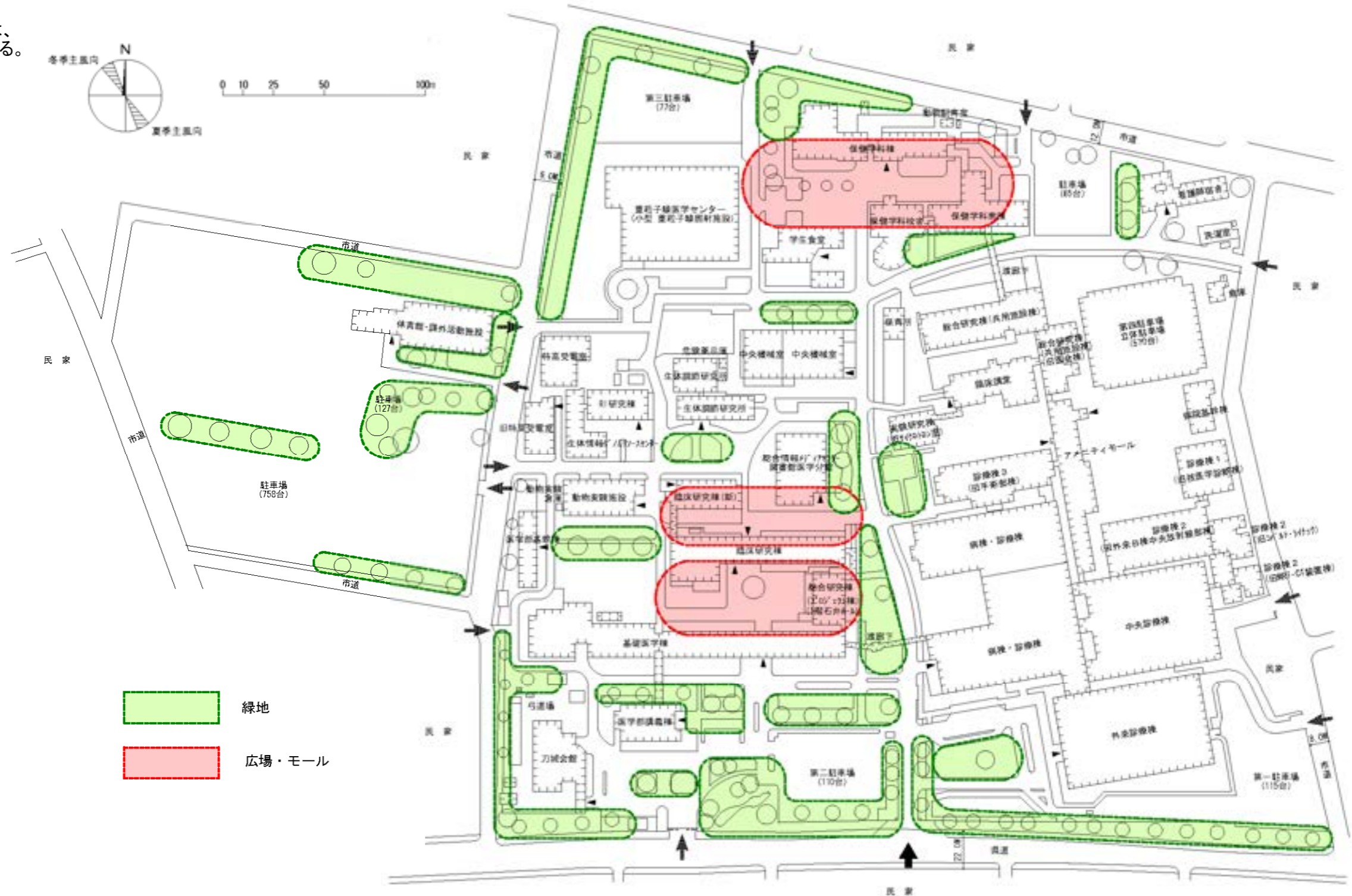
医学部正門ヒマラヤ杉



保健学研究科広場



医学系研究科広場



緑地計画図(概念図)

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-3 桐生キャンパス

(1) 敷地利用計画 (ゾーニング・施設整備)

【ゾーニング】

- ① ゾーニングについては平成13年度に文部科学省に提出した国立学校施設長期計画でのゾーニングプランを踏襲する。
- ② 保存地区ゾーン内の同窓記念会館及び守衛所等は登録有形文化財のため保存建物と位置付ける。
- ③ 工学部のエクステンションは各ゾーニング内で対応する。

【施設整備】

- ① 耐震性の劣る建物 (IS値=0.4以上0.7以下) については、計画的に適切な手法による耐震補強を実施する。
- ② 老朽建物 (築後25年を経過) 及び狭隘建物については、現状を把握し、適切な老朽及び狭隘改善のための措置を検討する。
- ③ サイン計画については統一したデザインにて見直しを行う。



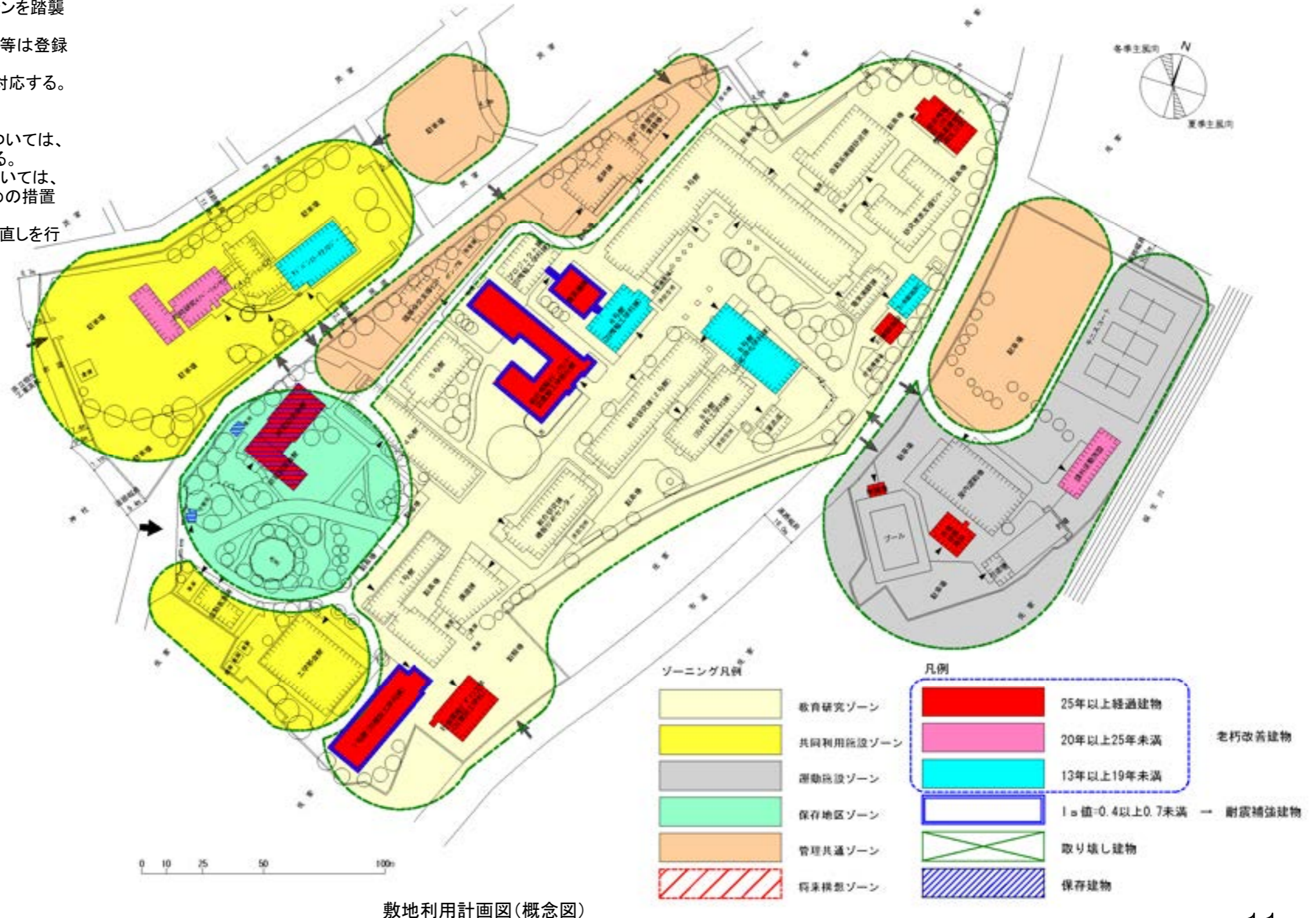
保存地区・保存建物



保存建物 (同窓記念会館)



保存建物 (守衛所)



敷地利用計画図 (概念図)

4. 各キャンパス毎のマスタープラン

4-3 桐生キャンパス

(2) 動線計画 (駐車場・駐輪場計画を含む)

【動線計画】

- ① 西側県道へ出る動線は車道が狭いため、安全を考慮して東側市道側への車両の出入りを検討する。また、その際にはキャンパス内のゲート整備についても合わせて検討を行う。
- ② 正門付近については、交通量も多く安全性の面からも対応を検討する。また、正門附近の歩車道の分離化を検討する。
- ③ 教職員・学生・来客者用の駐車場及び教職員、学生の駐輪場を確保するための検討を行う。
- ④ 西側県道及び東側市道にて分断されているキャンパスを有机的に連絡するような方法を検討する。



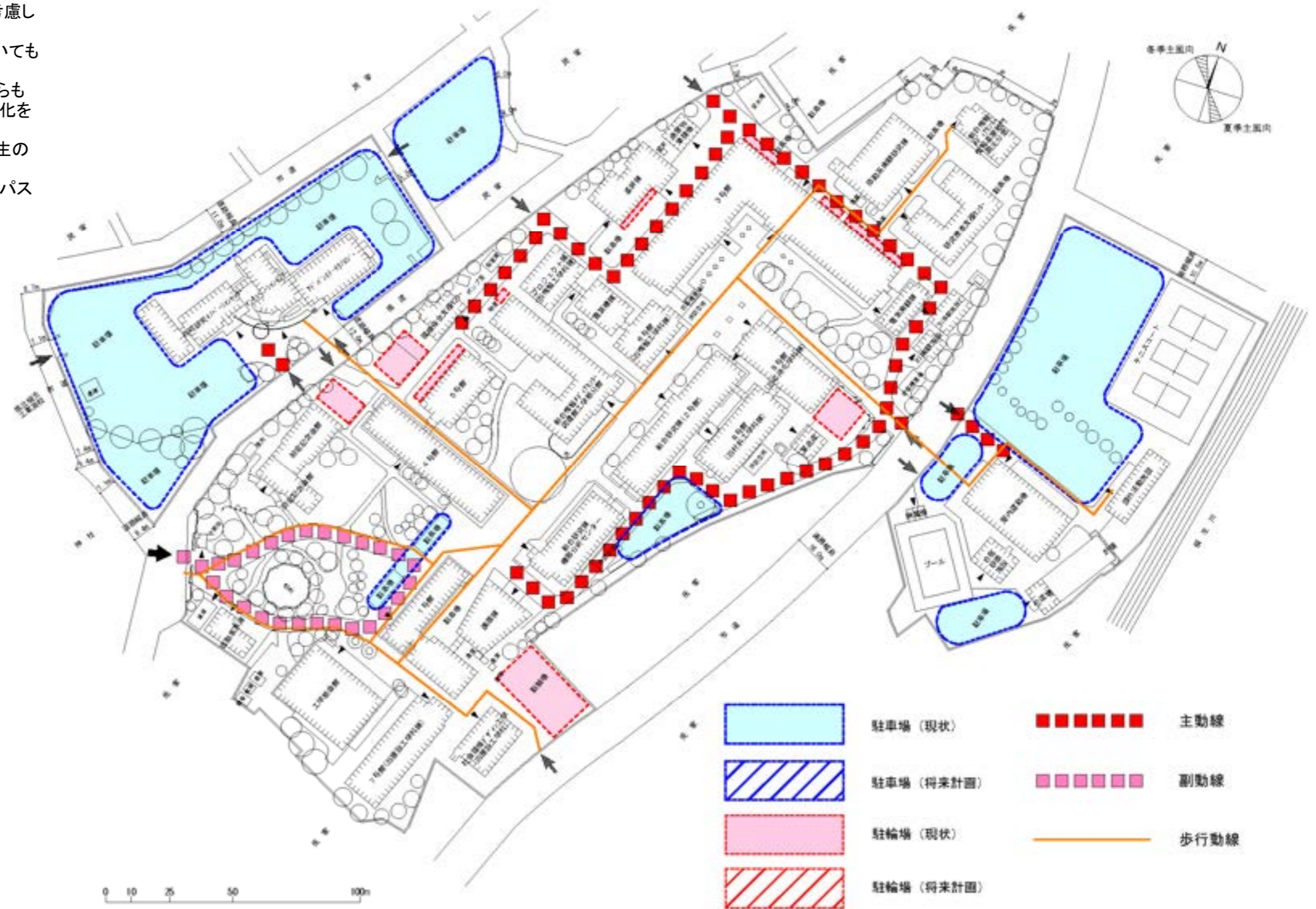
正門付近



東側市道出入口付近



西側県道出入口付近



動線計画図(概念図)

4-3 桐生キャンパス

(3) 緑地計画 (広場等)

【緑地計画】

- ① キャンパス内の西側県道の民家側には高木の植樹による緑地を確保する。また、建物周辺の緑地については修景緑地として定期的な維持管理を実施する。

【広場】

- ① 総合情報メディアセンター工学部分館の建物整備に関連して、南側については楠木の保存と合わせた広場として整備する。
- ② 中央モールからの動線を直線的に工学部会館に連結し、工学部会館前のモール化を検討する。



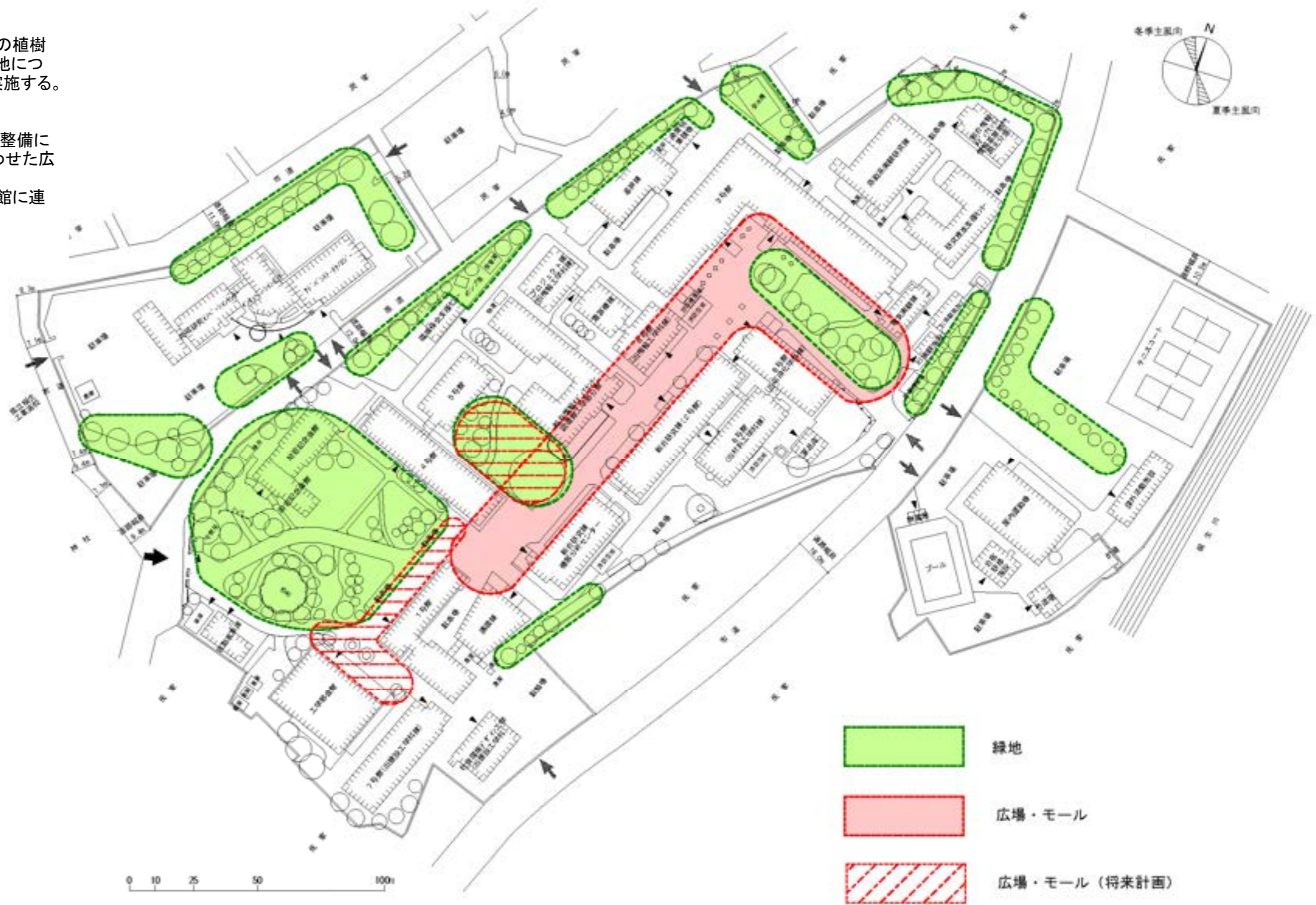
保存緑地内池

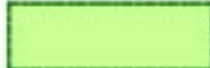




中央広場(東門側)



中央広場(中央部)



	緑地
	広場・モール
	広場・モール (将来計画)

緑地計画図(概念図)

5-1 荒牧キャンパス

(1) キャンパス環境

◆キャンパスの立地条件

荒牧キャンパスは、前橋市の北部、JR東日本の両毛線前橋駅から北北西に約6km離れた利根川の左河岸沿いに位置する。キャンパスの東側には、国道17号線が南北に走っており、周辺は主に第2種中高層住居専用地域の住宅地となっている。また、北側には群馬県総合体育センターがあり、利根川寄り隣地は区画整理済住宅地となっている。

前橋市は、関東平野部の北西端に位置しているため、特に冬季の季節風が強く気温も低くなるが積雪はほとんどなく、晴天の多い太平洋性気候に属している。

◆敷地条件

荒牧キャンパスは、敷地面積255,762㎡を有し、敷地内の高低差は5.1mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。地質構成は、表層から2m程度の河川堆積の粘土混じりの砂層があり、深層部は玉石混じりの砂礫層が分布しており、建物支持層として深さは3m程度である。

敷地内の建物延べ床面積は、44,500㎡、建ぺい率7.27%、容積率17.4%となっている。

都市計画上の用途地域は第1種中高層住居専用地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。

(2) キャンパス整備の経緯

◆教育学部

教育学部は、昭和24年5月群馬大学創設に伴い、群馬師範学校及び群馬青年師範学校を母体として、小学校教員養成(4年)課程、中学校教員養成(4年)課程をもって発足した。

その後、昭和26年4月に附属小学校、附属中学校、附属幼稚園が、また昭和54年4月に附属養護学校(平成19年に附属特別支援学校に改称)、昭和56年4月に附属教育実践研究指導センター(平成13年4月に附属学校教育臨床総合センターに改組)が設置された。なお、昭和40年4月に学芸専攻科が設置され、昭和41年4月に教育専攻科として改称されたが、平成2年4月に大学院教育学研究科(修士課程)が設置されたことに伴い、平成2年3月に教育専攻科は廃止された。

また、平成6年4月に特殊教育特別専攻科(平成19年4月に特別支援教育特別専攻科に改称)が設置され、平成20年4月に大学院教育学研究科(専門職学位課程)が設置された。

◆社会情報学部

社会情報学部は、人文社会科学と情報科学との融合の上に、学際的、総合的な教育研究を行うことを通して現代社会の要請にこたえることを目的として、教養部廃止(平成5年9月)に伴う改組・再編により平成5年10月に設置された。平成10年度には社会情報学研究科(修士課程)が設置された。

その後、平成18年度には、社会情報学科の1学科制から、情報行動学科と情報社会科学の2学科制に改組され、さらに、平成20年10月には、学部内設置として、学部附属社会情報学研究センターを設置した。

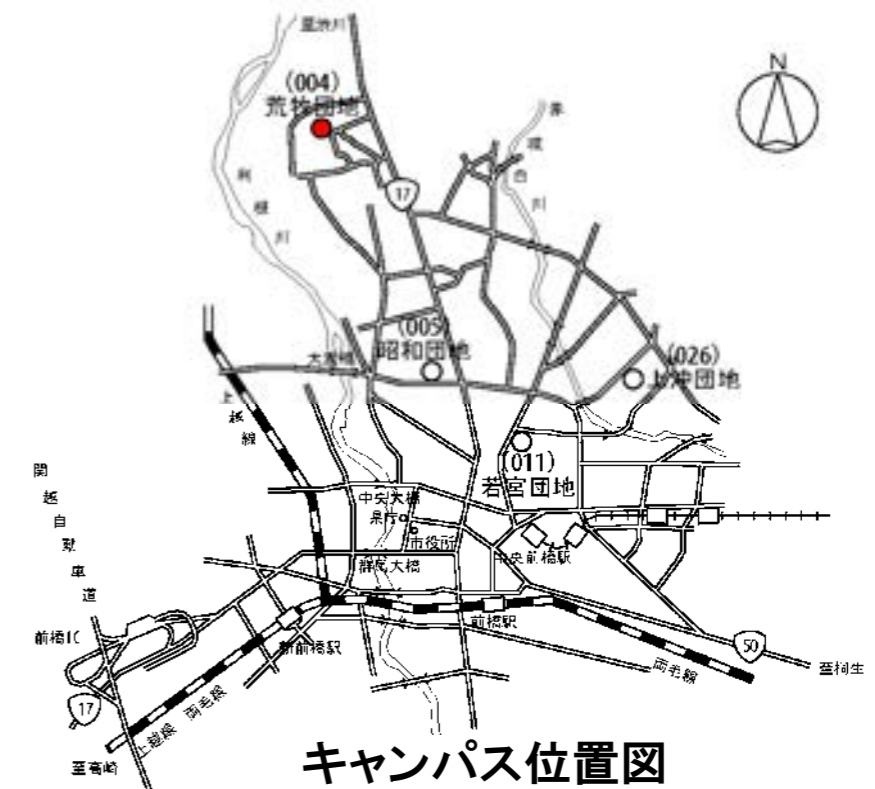
◆教養教育

教養教育は、昭和24年の大学発足当時、学芸学部が中心となり実施してきたが、昭和40年4月から、学芸学部から独立した教養部が設置された。平成5年10月には、新学部である社会情報学部が設置されると同時に、教養部が廃止された。

その後、数度の改革を経て、平成18年4月には、大学教育センター、学生支援センター、学生受入センター、及び健康支援総合センターからなる大学教育・学生支援機構が設立され、平成23年4月からは、大学教育センターを教育基盤センターに改組し、全学に共通する教育の基盤を整備するための組織とし、さらに、教養教育及びこれに関連した教育体制の在り方を研究するため、教育基盤センター内に教育企画室を設置した。



案内図



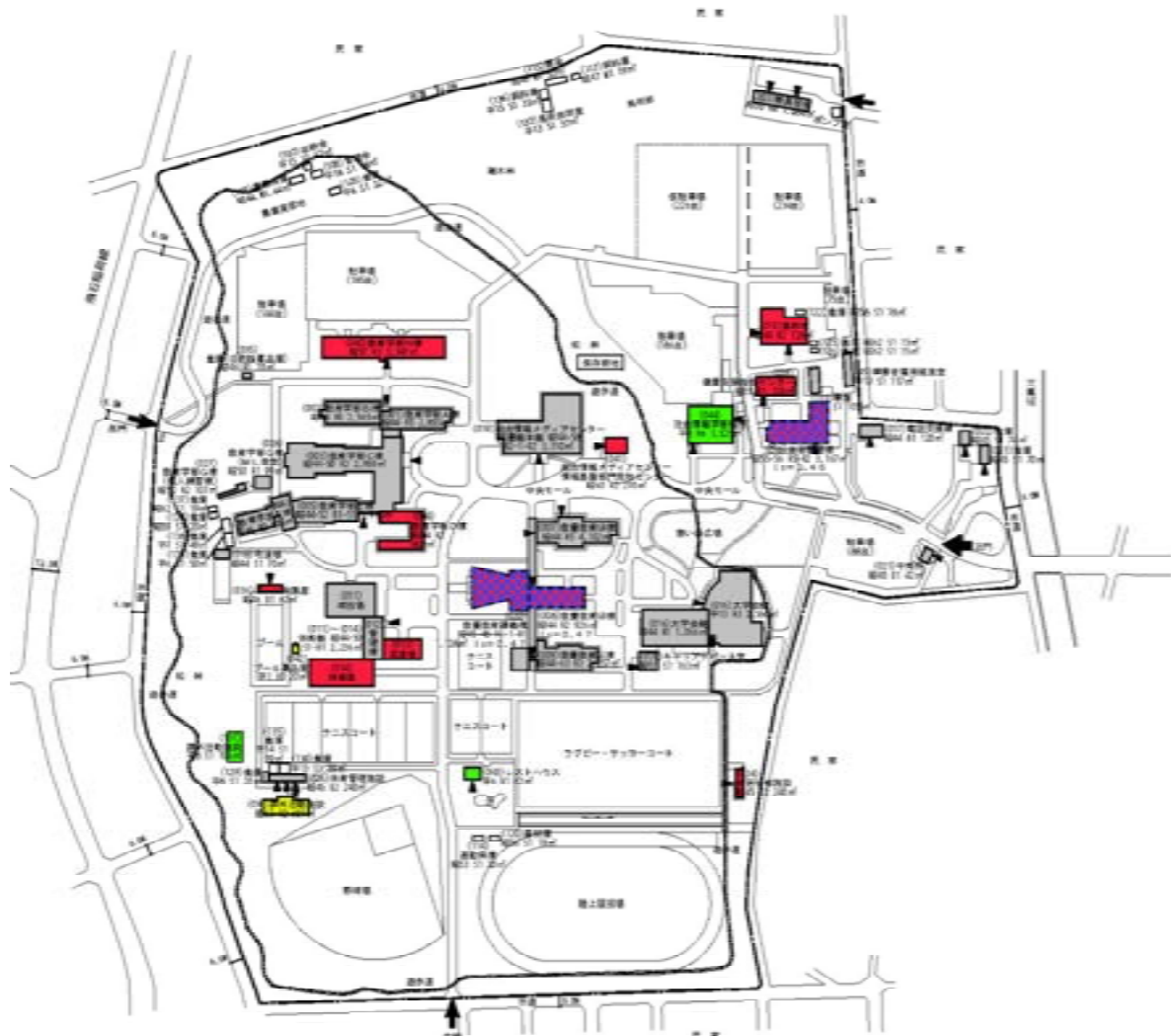
キャンパス位置図

5-1 荒牧キャンパス

(3) 耐震・老朽状況

・耐震補強が必要な建物 (Is値=0.4以上0.7未満) は、本部管理棟 (Is値=0.46) と教養教育GB棟 (Is値=0.47) の2棟であり、計画的な整備が必要である。

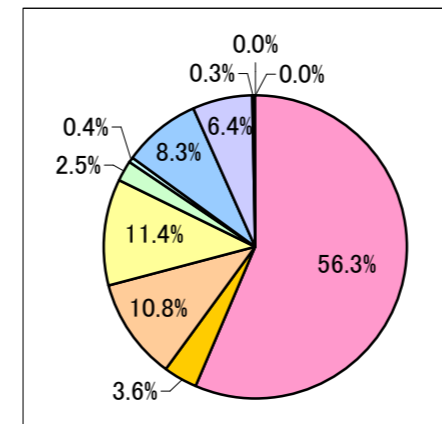
■ 経年別建物配置図



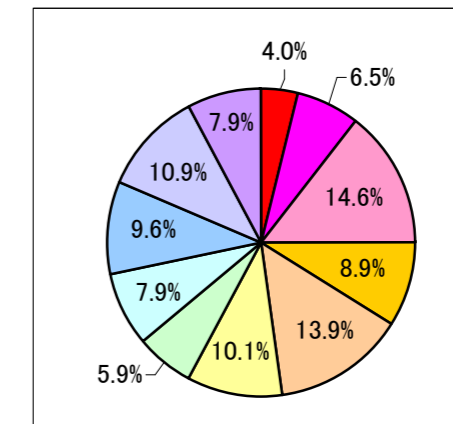
凡例

	耐震改修必要建物 Is値=0.4以上0.7未満 旧耐震 未改修建物 (建設年、昭56以前：1981以前)
	老朽建物 建設後25年以上経過、未改修建物 (建設年、昭60以前：1985以前)
	将来的整備必要建物(今後12年程度) 建設後、20年以上25年未満経過 未改修建物 (建設年、昭61～平2：1986～1990)
	将来的整備必要建物(今後12年程度) 建設後13年以上19年未満経過 未改修建物 (建設年、平3～平9：1991～1997)
	改修済建物及び改修予定なし建物

■ 経年別保有面積の割合



荒牧地区



全国

経過年数	
	50年以上
	45～49年
	44～40年
	35～39年
	34～30年
	25～29年
	24～20年
	15～19年
	14～10年
	5～9年
	5年未満

- ・25年以上経過した建物の比率は82.1%となっており、全国平均57.9%と比べて高い割合であり、古い建物が多いことがわかる。
- ・現状で経年25年以上の未改修建物は約11,014㎡であるが、今後12年間に4,404㎡が新たに経年25年超となり、随時、改修を計画する必要がある。

(4) 施設整備状況

- ・大学教育・研究施設のうち、教育学部の整備率は87.6%であり、全国立大学の平均88.5%と比べて同程度の整備率である。
- ・図書館(本館の整備率62.8%)・体育施設等の整備率は107.2%と全国立大学の平均90.7%を超えている。
- ・支援施設の整備率は126.7%であり、全国立大学の平均117.9%を超えている。

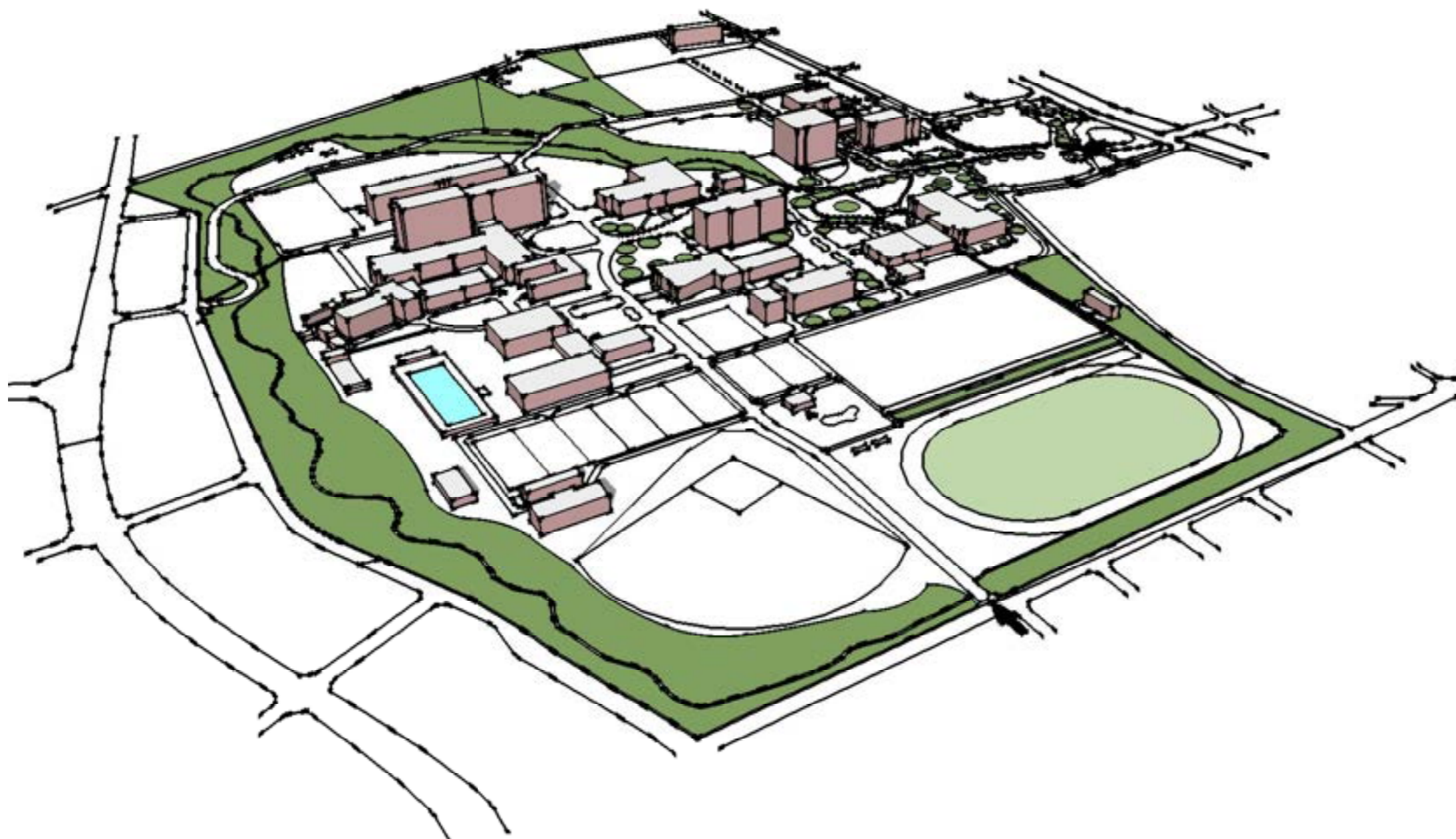
■ 面積区分毎の整備率

面積区分	大学教育・研究施設			図書館 (本館)	図書館・体育 施設等(全学)	支援施設 (全学)
	教育学部	社会情報学部	教養教育			
保有面積(㎡)	14,905	3,874	8,852	3,069	52,280	12,809
必要面積(㎡)	17,010	4,244	9,603	4,886	48,790	10,108
整備率 (%)						
全国との比較						
	荒牧 全国	荒牧 全国	荒牧 全国	本学 全国	本学 全国	

5-1 荒牧キャンパス

(5) 屋外環境整備

- ① 平成20年に整備した正門から図書館までの憩いの広場を含めた中央モール整備により、安全でゆとりと潤いのあるキャンパス空間が確保されている。中央モールの両側にはけやき並木を配置し、アカデミックキャンパスに相応しい環境となっている。
- ② 中央モールでは、モール整備と駐車場整備により歩車道の分離は明確にされたが、一方では緊急車両用通路を使用して建物入り口の駐車禁止場所へ進入する違法車両も多くみられるため、中央モール以外においても人と車の動線を考慮した動線分離並びにサービス動線を含めた交通計画を検討する必要がある。
- ③ 自然環境を守る観点から、積極的に松林等の環境保全に努めるとともに、学生、教職員及び地域住民に親しみやすいキャンパスセラピーコース（キャンパス一周遊歩道）を整備している。
- ④ キャンパス内のサインについては、老朽化した交通標識などを含めて現状では不十分であり、交通標識を含めた統一したサイン計画を検討する必要がある。



メインストリート



構内案内表示



構内案内表示

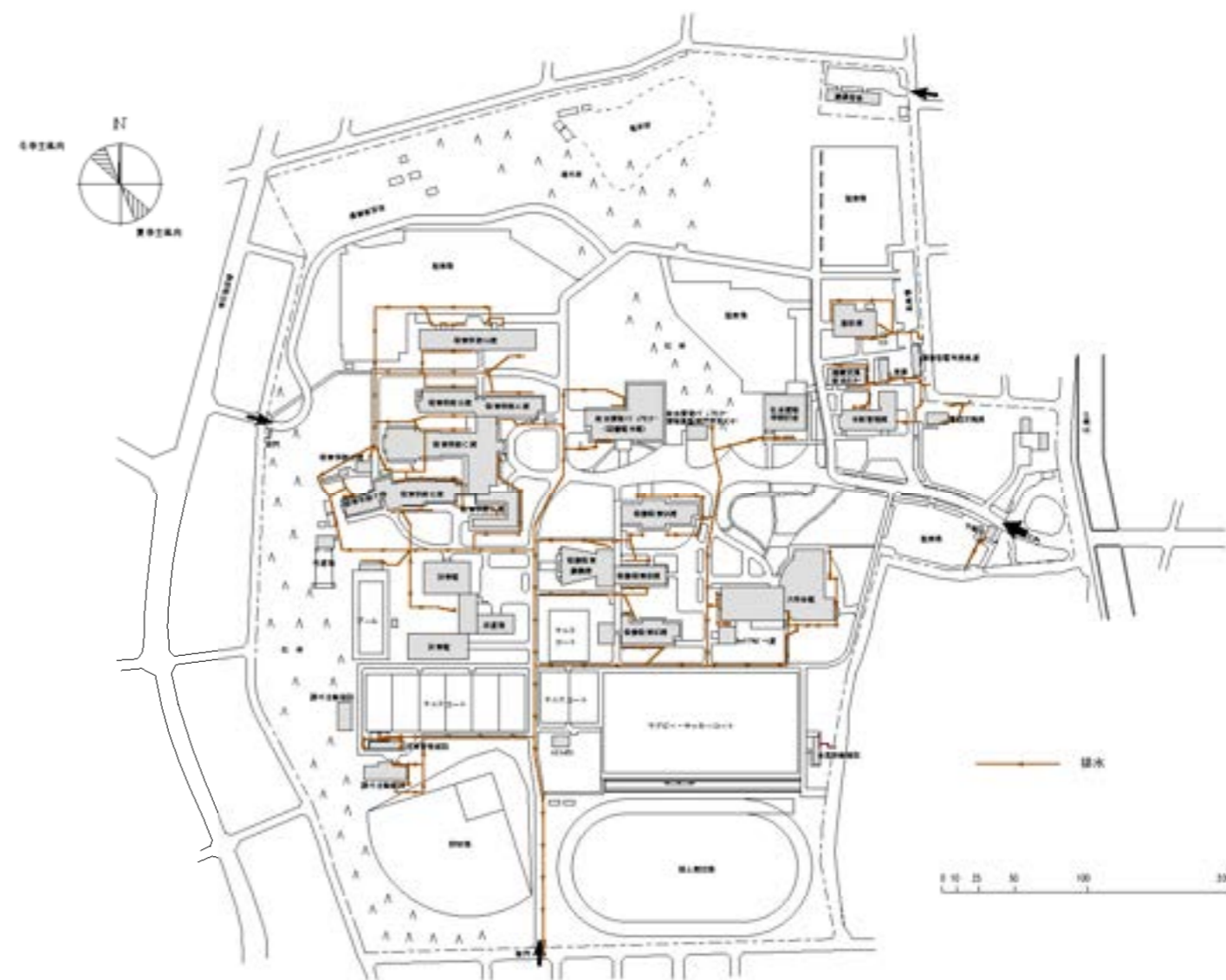
5-1 荒牧キャンパス

(6) インフラ整備

■ 給水設備



■ 排水設備



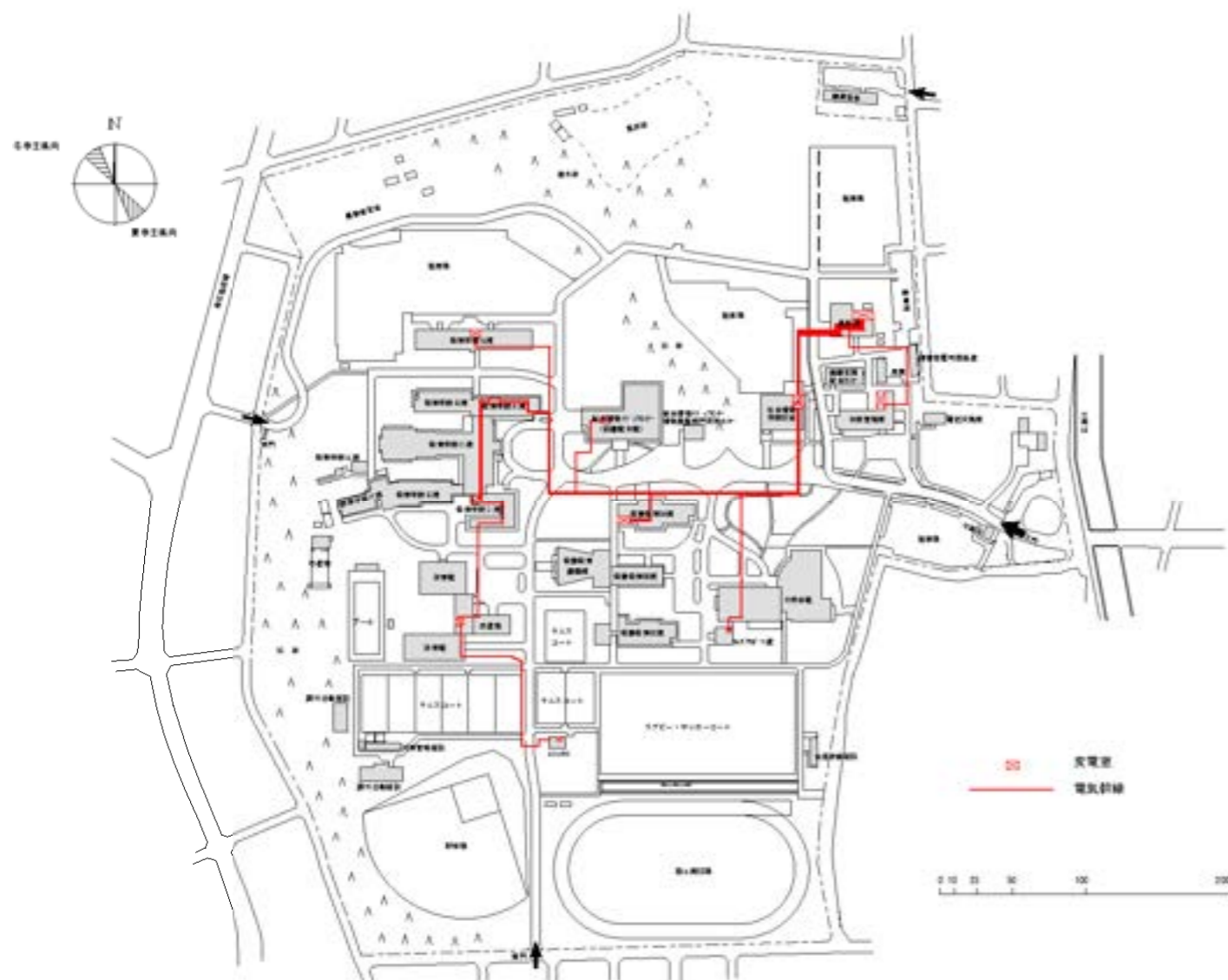
- ・荒牧キャンパスにおいては、構内井戸2本の専用水道により給水全てを賅っている。現状では揚水量・水質共に特に支障はないが、井戸の枯渇・自然災害等への危機管理を考慮したバックアップ体制等の検討が必要である。
- ・基幹棟から各棟へ供給している給水管は昭和62年度に更新しており、現状では特に問題はないが、経年劣化に対する計画的な更新が必要とされる。

- ・平成5年の基幹整備において雨水系統と雑排水・汚水系統に分離され、雑排水・汚水系統は公共下水道に接続された。現状では特に問題は生じていないが、雨水に関しては環境配慮上出来るだけ敷地内で浸透処理させる方向で検討しており、透水性アスファルト等による駐車場整備を積極的に推進する。

5-1 荒牧キャンパス

(6) インフラ整備

■ 電気設備

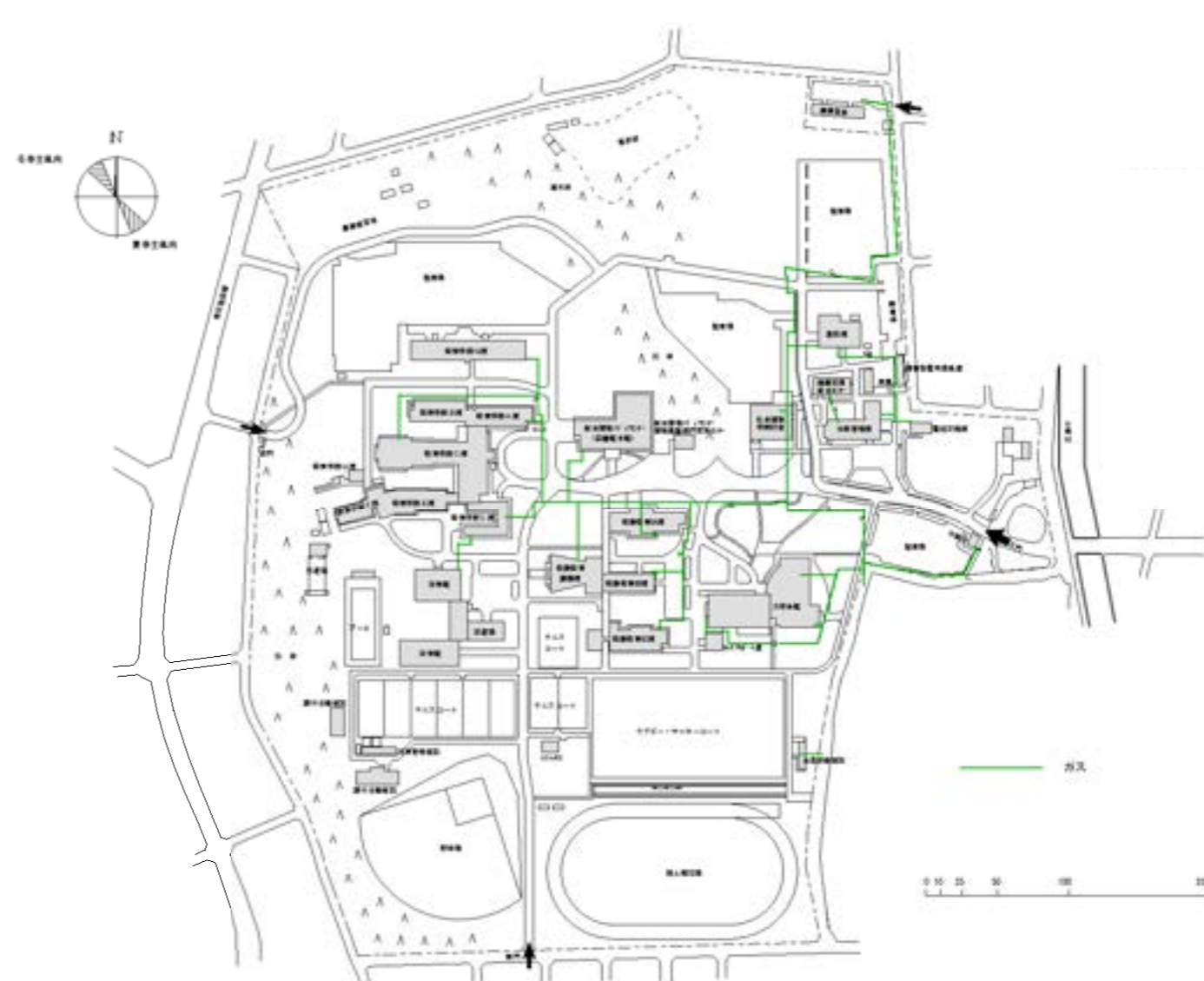


- ・引き込み受電室の高圧配電盤は、平成19年に改修更新済みであるが、受電点のGR付PAS（地絡継電装置付き交流負荷開閉器）は平成3年に設置されたまま更新時期に達している。
- ・サブ電気室は、屋内電気室11カ所、屋外キュービクル1カ所がある。
- ・構内の高圧ケーブルには、老朽化した昭和40年代の物も存在しており更新が必要である。
- ・電話交換機設備については、平成5年製造で既に更新時期に達している。

■ エレベータ

- ・本部管理棟エレベータ1台に関して法的に既存遡及はないが、2012年問題として部品供給が不可能となるため計画的に更新を図る必要がある。

■ 都市ガス設備



- ・都市ガスの埋設配管は、一部に老朽化した配管用炭素鋼鋼管（白）を使用しており、ライフラインの安全性を確保する観点から、計画的な更新の必要がある。

■ 空調設備

- ・平成19年度からボイラ設備による中央暖房方式を廃止して個別空調方式に切り替えを行った。
- ・社会情報学部及び大学会館の空調用ガス焚吸収式冷温水発生機は、経年劣化に対する空調方式への変換を含めた計画的な更新が必要とされる。

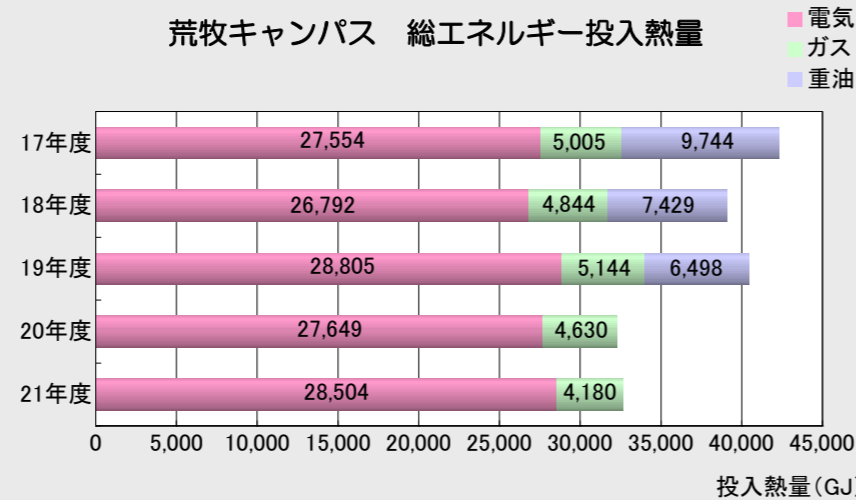
5-1 荒牧キャンパス

(7) エネルギー使用量

◆総エネルギー投入量

荒牧キャンパスにおける総エネルギー投入熱量(GJ)としては、平成19年度にボイラ設備を廃止し重油を削減した分、平成20年度では前年比約20.2%縮減することができたが、平成21年度においては、建物改修に伴う空調負荷の増加により前年比若干の増加となった。

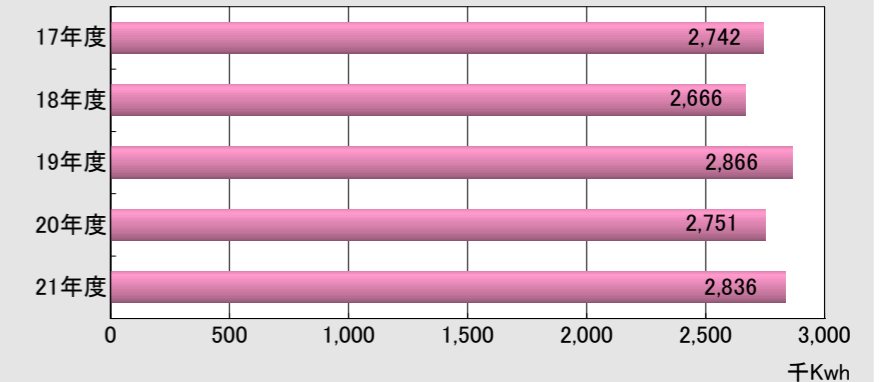
荒牧キャンパス 総エネルギー投入熱量



◆電気使用量

荒牧キャンパスにおける電気使用量に関しては、省エネパトロール及び夏季、冬季の節電メール等の推進を行っているが、最大電力を超過しているのが現状である。
また、建物の改修工事等により省エネ型機器に更新を行っているが、冷暖房負荷が電気式に整備されているため、今後、機器の稼働も含め増加が懸念される。

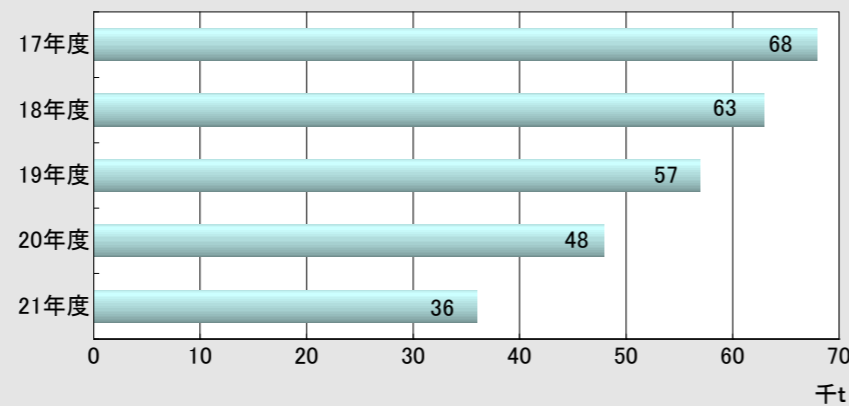
荒牧キャンパス【電気】使用量



◆水資源使用量

群馬大学の3キャンパス（荒牧、昭和、桐生）は、主に地下水（井水）を使用しており、荒牧キャンパスにおける水資源使用量は、平成19年度にボイラ設備の廃止により、段階的に減少傾向となっている。数量では、19年度比21千t程度使用量が減少した。

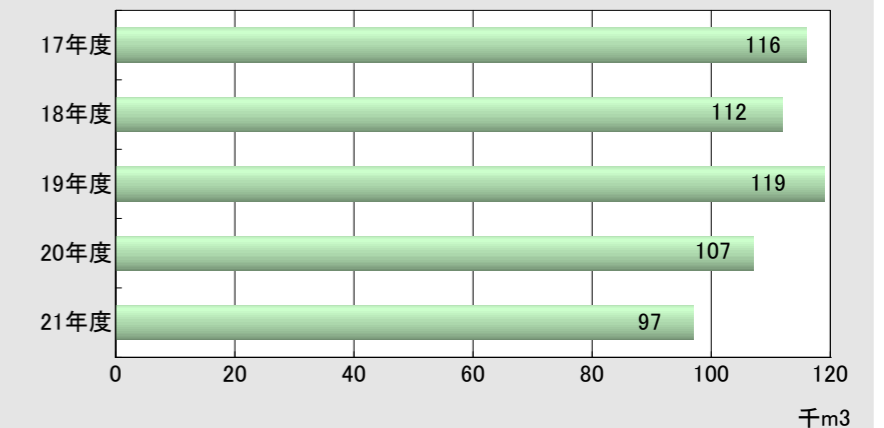
荒牧キャンパス【水資源】使用量



◆ガス使用量

荒牧キャンパスにおけるガス使用量に関しては、エネルギー使用量の「見える化」、省エネパトロール等の省エネルギー対策を推進した結果、都市ガス使用量は減少した。

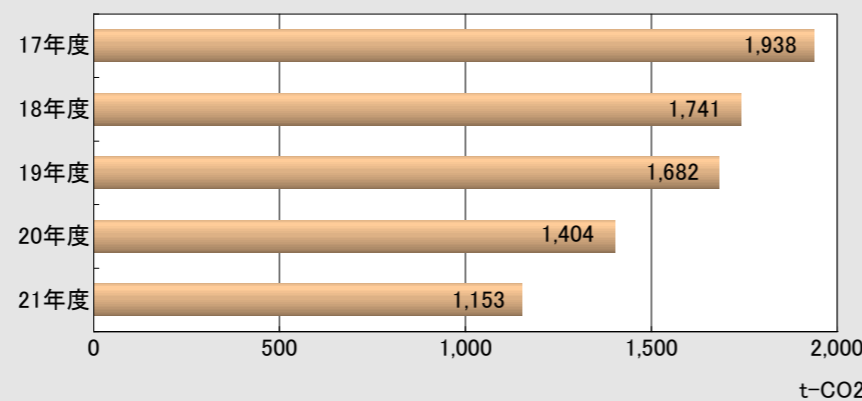
荒牧キャンパス【ガス】使用量



◆二酸化炭素排出量

本学では平成19年度に温室効果ガス排出抑制等のための実施計画を定めて削減に努めている。
荒牧キャンパスにおける二酸化炭素排出量は、平成19年度にボイラ設備を廃止したため減少した。

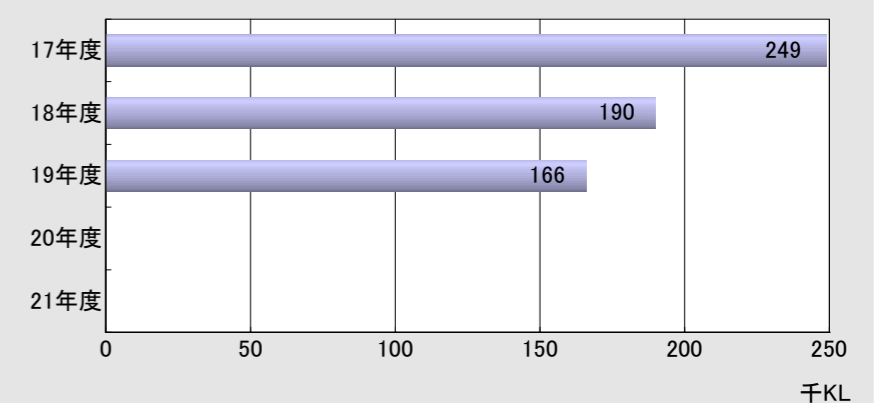
荒牧キャンパス【二酸化炭素】排出量



◆重油

荒牧キャンパスにおける重油使用量に関しては、平成19年度にボイラ設備を廃止したため、平成20年度以降の重油使用量はゼロとなっている。

荒牧キャンパス【重油】使用量



5-2 昭和キャンパス

(1) キャンパス環境

◆キャンパスの立地条件

昭和キャンパスは、前橋市街地北西部に位置し、国道17号線より約150m西に入った医科系団地である。キャンパス周辺は、公道に接しており、住宅、商店等が密集している。構内への交通は、路線バスが乗り入れているが、外来患者、職員等共に、自家用車による入構が多い。なお、本団地は前橋駅から北方へ4kmでバスでおおよそ15分である。

◆敷地条件

昭和キャンパスは、敷地面積161,631㎡を有し、敷地内の高低差は1.5mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。地質構成は、表層から2m程度までは河川堆積の粘土混じりの砂層があり、深層部は玉石混じりの砂礫層が分布しており、建物支持層として深さは4m程度である。

敷地内の建物延べ床面積は、170,157㎡、建ぺい率27.56%、容積率105.27%となっている。

都市計画上の用途地域は第2種中高層住居専用地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。

(2) キャンパス整備の経緯

◆医学部医学科

医学部医学科は、昭和18年の前橋医学専門学校設置、昭和23年の前橋医科大学設置を経て、昭和24年に新制群馬大学医学部となり、この時に医学科が設置されたものである。

◆医学部保健学科

医学部保健学科は、昭和19年に前橋医学専門学校附属医院に看護婦養成所を開設、昭和26年に群馬大学医学部附属看護学校と改称し、その後、昭和40年に医学部附属助産婦学校となった。昭和52年に医学部附属助産婦学校と医学部附属臨床検査技師学校が包括され、医療技術短期大学となり、その後平成8年に医学部保健学科となった。現在、保健学科には、看護学専攻、検査技術学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻が設置されている。

◆大学院医学研究科

大学院医学系研究科は、昭和30年に生理学系、病理学系、社会医学系、内科学系、外科学系の5専攻よりなる博士課程として設置された。その後、平成15年4月に5専攻を医科学専攻に改組した。平成19年4月には、生命医科学専攻（修士課程）を設置した。

◆大学院保健学研究科

大学院医学系研究科に平成13年4月に保健学専攻（修士課程）、平成15年4月には保健学専攻（博士課程）を設置した。その後、平成23年4月に大学院保健学研究科として博士前期課程、博士後期課程を設置した。

◆生体調節研究所

生体調節研究所は、昭和26年に医学部の附属研究施設として内分泌研究施設が設置され、昭和38年に内分泌研究所として附属研究所となり、平成6年に改組して現在に至っている。また、昭和47年に内分泌研究所附属研究施設ホルモン測定センターが設置され、平成6年に生体調節研究所附属研究施設生理活性物質センターとなり、平成16年に生体調節研究所附属生体情報ゲノムリソースセンターとなり、現在に至る。また、平成19年に生体調節研究所附属代謝シグナル研究展開センターを設置し現在に至る。



案内図



キャンパス位置図

5-2 昭和キャンパス

(3) 耐震・老朽状況

・耐震補強が必要な建物（ I_s 値=0.4以上0.7未満）は、動物実験施設（ I_s 値=0.51）の1棟であり、計画的な整備が必要である。

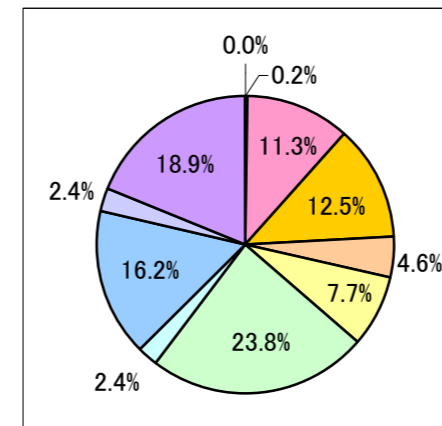
■ 経年別建物配置図



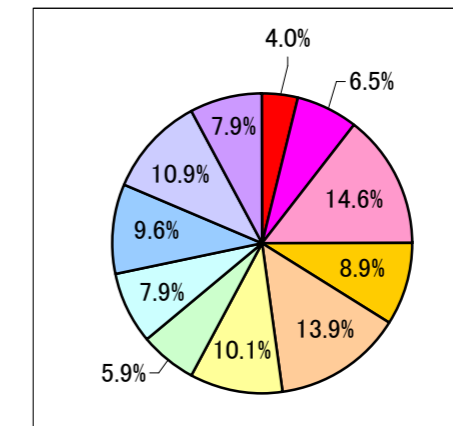
凡例

	耐震改修必要建物 I_s 値=0.4以上0.7未満 旧耐震 未改修建物 (建設年, 昭56以前: 1981以前)
	老朽建物 建設後25年以上経過, 未改修建物 (建設年, 昭60以前: 1985以前)
	将来的整備必要建物(今後12年程度) 建設後, 20年以上25年未満経過 未改修建物 (建設年, 昭61~平2: 1986~1990)
	将来的整備必要建物(今後12年程度) 建設後13年以上19年未満経過 未改修建物 (建設年, 平3~平9: 1991~1997)
	改修済建物及び改修予定なし建物

■ 経年別保有面積の割合



昭和地区



全国

経過年数	
	50年以上
	45~49年
	44~40年
	35~39年
	34~30年
	25~29年
	24~20年
	15~19年
	14~10年
	5~9年
	5年未満

・25年以上経過した建物の比率は36.1%となっており、全国平均57.9%と比べて低い割合であり、比較的新しい建物が多いことがわかる。
 ・現状で経年25年以上の未改修建物は約14,424㎡であるが、今後12年間に42,064㎡が新たに経年25年超となり、随時、改修を計画する必要がある。


(4) 施設整備状況

・大学教育・研究施設のうち、医学部の整備率は92.8%であり、国立大学の平均88.5%と比べて若干整備率が高く、保健学科及び生体調節研究所の整備率は85.9%及び86.7%であり、国立大学の平均88.5%と比べて若干整備率が低い。
 ・図書館(分館の整備率82.2%)・体育施設等の整備率は107.2%と国立大学の平均90.7%を超えている。
 ・支援施設の整備率は126.7%であり、国立大学の平均117.9%を超えている。

■ 面積区分毎の整備率

面積区分	大学教育・研究施設			図書館 (医学分館)	図書館・体育 施設等(全学)	附属病院	支援施設 (全学)
	医学部	保健学科	生体調節研究所				
保有面積(㎡)	40,351	16,116	6,115	2,247	52,280	67,381	12,809
必要面積(㎡)	43,472	18,753	7,052	2,734	48,790	68,925	10,108
整備率(%)							
全国との比較	昭和: 92.8% 全国: 88.5%	昭和: 85.9% 全国: 88.5%	昭和: 86.7% 全国: 88.5%	本学: 107.2% 全国: 90.7%	本学: 97.8% 全国: 100.3%	本学: 126.7% 全国: 117.9%	

5-2 昭和キャンパス

 (5) 屋外環境整備

- ① キャンパス内中央を南北に縦断するメイン道路により、教育研究ゾーンとした医学部・大学院医学系研究科エリアと診療施設ゾーンとした附属病院エリアとに比較的明確にゾーニングされている。附属病院エリアにおいては、400台規模の患者用立体駐車場が整備されているが、年々増加する外来患者数の影響からかメイン道路における交通渋滞が発生している。また、メイン道路を一方通行化したことにより医学部・大学院医学系研究科エリア内の周回道路が狭く構内周回道路として充分機能しておらず、わかりにくいキャンパス動線となっている。このため、駐車場を含めた構内交通計画を検討する必要がある。
- ② キャンパス西側は現在教職員用駐車場となっているが、将来構想ゾーンとして位置付け、駐車場を含めたキャンパス計画の検討を行う。



中央道路混雑状況



外来者用立体駐車場

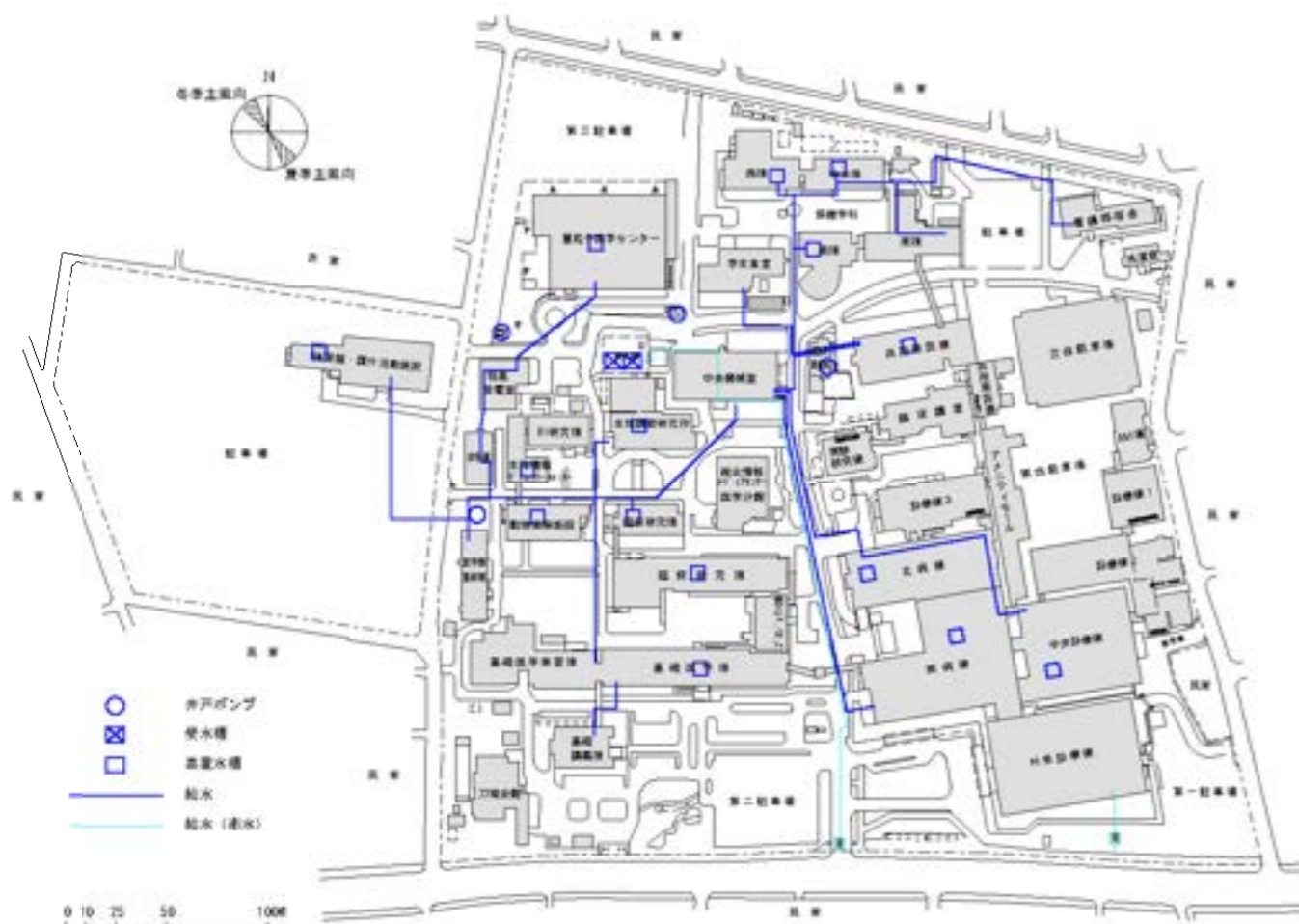


教職員専用駐車場

5-1 昭和キャンパス

(6) インフラ整備

■ 給水設備



■ 排水設備



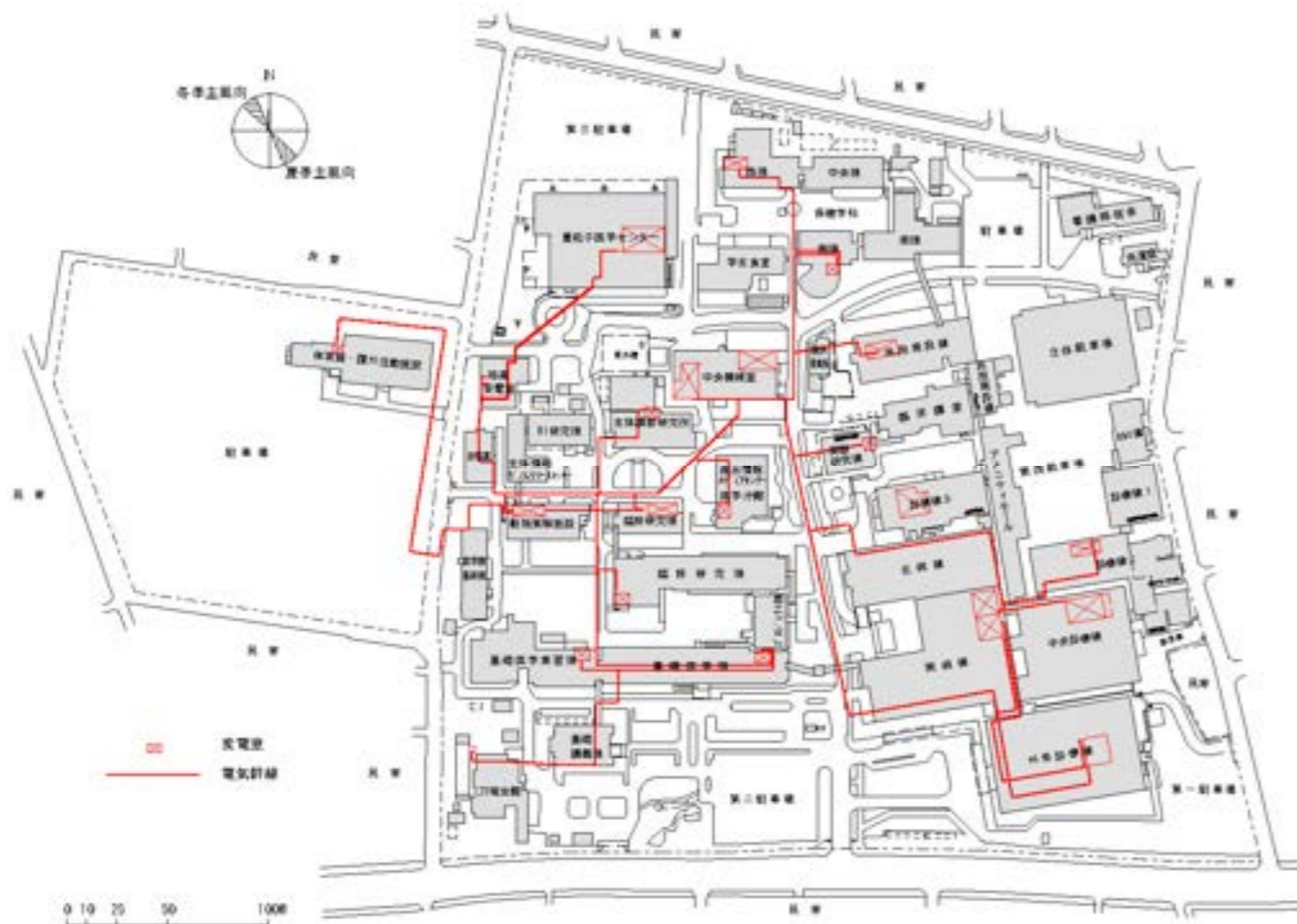
- ・昭和キャンパスにおいては、構内井戸5本の専用水道により生活給水の殆どを賄っている。現状では揚水量・水質共に特に支障はないが、井戸の枯渇・自然災害等への危機管理を考慮したバックアップ体制を既に確保している。
- ・専用水道施設に関しては、経年劣化等に対し附属病院機能に支障を来さないよう逐次計画的な更新を検討する必要がある。

- ・雨水系統、雑排水・汚水系統は分流方式となっており、雑排水・汚水系統は公共下水道に接続され、雨水は河川に放流されている。
- ・現状では特に問題は生じていないが、経年劣化に対する計画的な更新が必要とされる。
- ・現状における最終柵での公共下水道受け入れ基準を満足する監視設備の整備及び管理体制を整備する必要がある。

5-1 昭和キャンパス

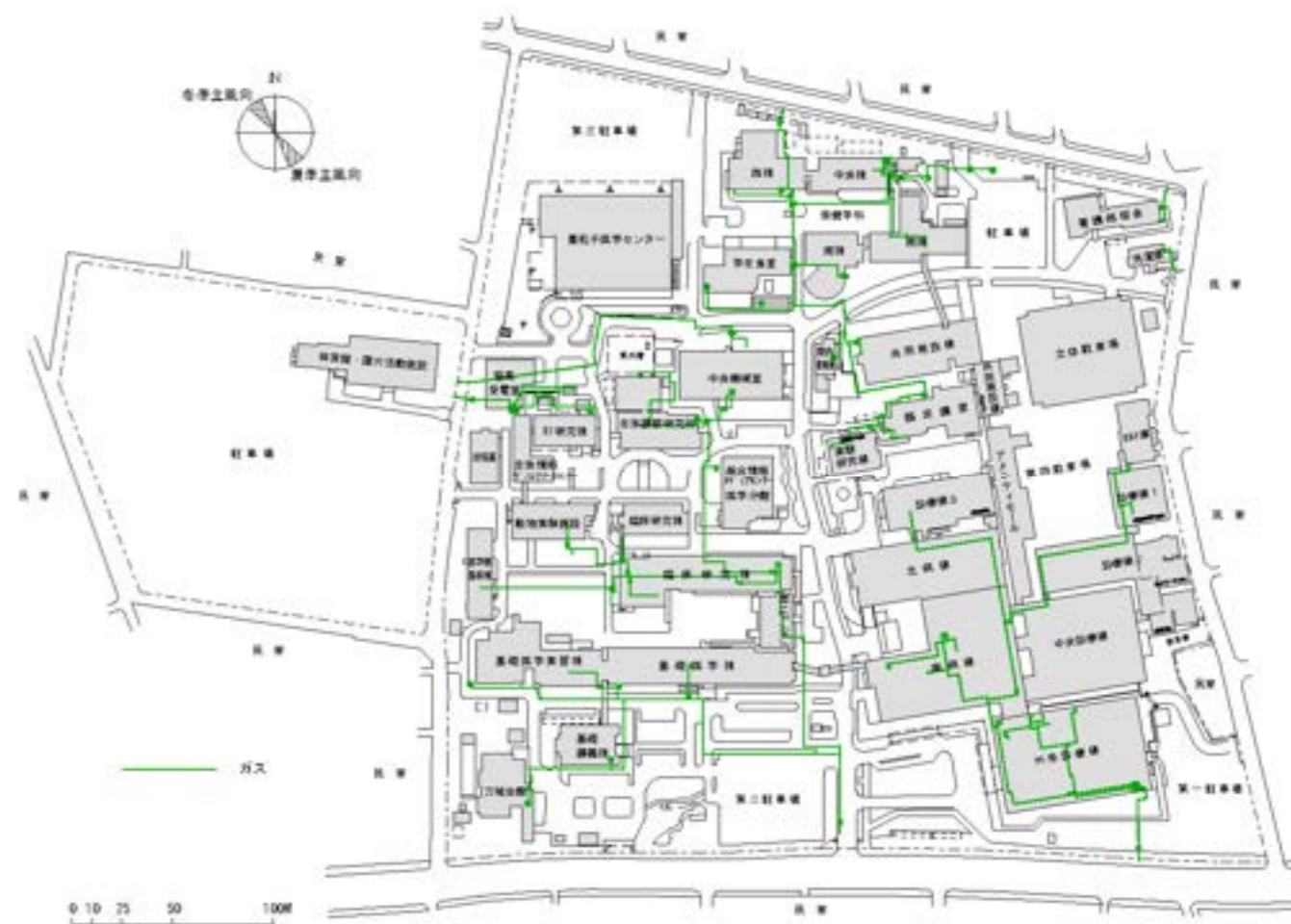
(6) インフラ整備

■ 電気設備



- ・昭和キャンパスは、66kVの特別高圧で受電しており、平成20年の重粒子線照射施設建設時に受電容量が不足したため、受電設備の更新を行った（特高変圧器6,000kVA×4台）。
- ・サブ電気室は、屋内電気室23カ所、屋外キュービクルが1カ所あり、保健学科西棟の電気室は老朽化が著しく更新が必要である。
- ・自家発電設備は、コ・ジェネ/非常用として1,250kVA×2台（平成10年設置）と非常用として500kVA（病棟用、中央診療棟用）×2台を保有しており、コ・ジェネ（ピークカット運転）発電機は、中間期以外は平日毎日運転をしている。今後、コ・ジェネ用機器の更新を含めて検討が必要とされる。
- ・構内の高圧ケーブルには、老朽化した昭和40年代の物も存在しており更新が必要である。
- ・電話交換機設備においては、平成18年製造の院内PHS対応型が設置されているが、PHS端末機の大幅な増加に伴い、アンテナ並びに内線回線数の不足に対する増設が必要とされている。
- ・病棟においては、ナースコールシステムが約10年を経過し液晶パネルの老朽化が目立ち、更新時期に達している。

■ 都市ガス設備



- ・都市ガス設備に関しては、東京ガス（株）から中央機械室熱源用として中圧ガス、その他系統として低圧ガスが供給されている。

■ 空調設備

- ・病院地区の外来・病棟・中央診療棟は、中央方式により中央機械室より熱源を供給している。医学部地区は、個別空調方式を採用している。
- ・中央熱源としては、蒸気・冷水・温水・冷温水を病院建物に供給を行っているが、熱源設備の更新に関しては、熱源供給システムの変更に関する検討も含めて計画的な対応が必要とされる。

■ 医療ガス設備

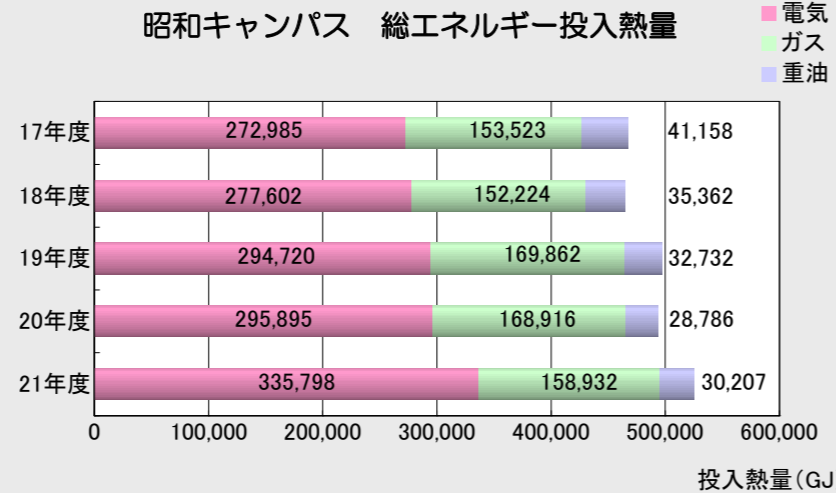
- ・医療ガス設備は、液酸タンクより酸素供給。その他医療ガス設備は、棟単位を基本として、マニホールド等が設置され供給されている。
- ・人命に直結する設備であるため、安全確実性が求められることから、定期的な点検保守及び更新計画が必要とされる。

5-2 昭和キャンパス

(7) エネルギー使用量

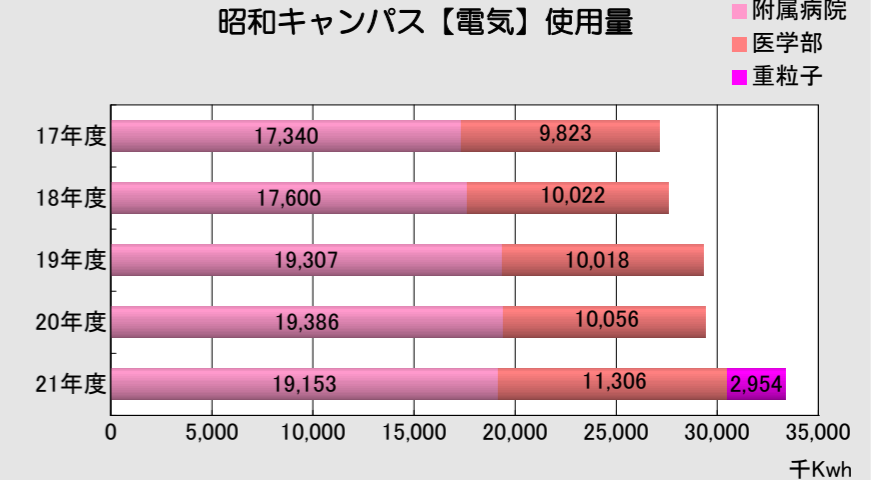
◆総エネルギー投入量

昭和キャンパスにおける総エネルギー投入熱量(GJ)は、平成21年度の重粒子線の装置承認稼働分による増加で、前年度比約6.3%増となった。平成22年度からの本格的治療開始に伴い更なる増加が見込まれる。



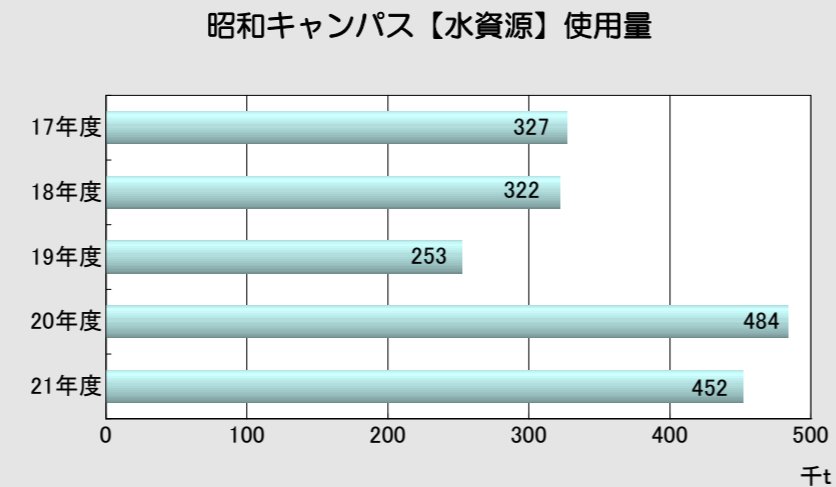
◆電気使用量

昭和キャンパスにおける電気使用量に関しては、エネルギー使用量の「見える化」、省エネパトロール等の省エネルギー対策を推進してきたが、全体の電力使用量は13.4%増加した。要因としては、新規に重粒子線施設が稼働を開始したことによる大幅な電力使用量の増加が生じた結果にあるが、平成22年度以降の重粒子線治療開始に伴う電気使用量の増加が予想される。



◆水資源使用量

群馬大学の3キャンパス（荒牧、昭和、桐生）は、主に地下水（井水）を使用している。昭和キャンパス水資源使用量の平成20年度増加に関しては、前年度までの未計量部分の判明に伴う増加となっているが、平成21年度は前年度比約0.7%、数量で32千t程度の使用量減となった。



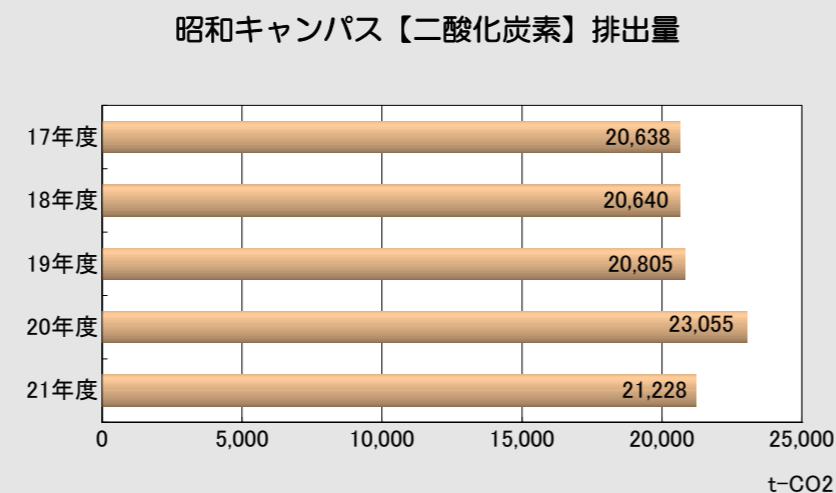
◆ガス使用量

昭和キャンパスにおけるガス使用量に関しては、エネルギー使用量の「見える化」、省エネパトロール等の省エネルギー対策を推進した結果、新たに重粒子線施設が稼働を開始しても全体としての都市ガス使用量は減少した。



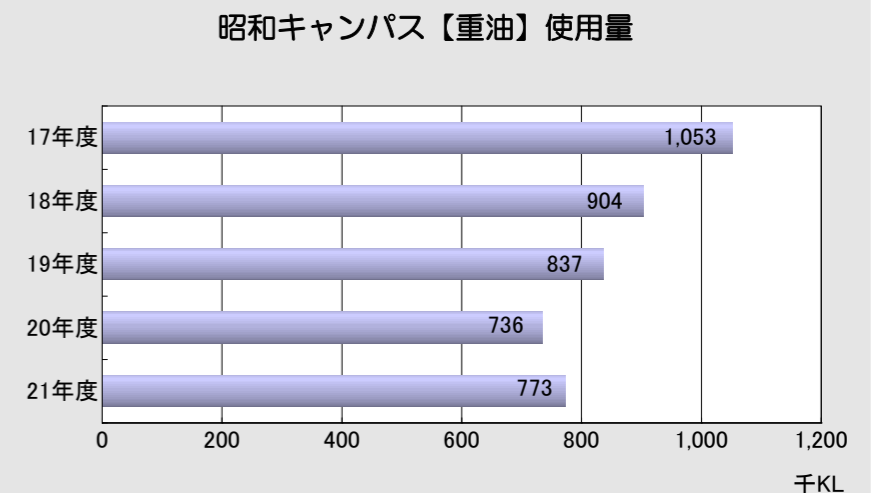
◆二酸化炭素排出量

昭和キャンパスの二酸化炭素排出量に関して、本学では平成19年度に温室効果ガス排出抑制等のための実施計画を定めて削減に努めている。平成19年度までは、ほぼ一定の排出量となっていたが、平成20年度は電力会社の原子力発電所停止による火力発電増加による電力排出係数の上昇に伴い増加した。



◆重油

昭和キャンパスにおける重油使用量に関しては、平成19年度からコスト面、環境面を考慮し冷暖房熱源の燃料を重油から都市ガスに替えた事により、平成20年度までは縮減された。平成21年度は、昭和キャンパスで重粒子線施設が稼働を開始したことにより、契約電力抑制のために自家用発電機の長時間運転を実施し、電力のピークカットを計画的に実施したため、重油の使用量は増加した。



5-3 桐生キャンパス

(1) キャンパス環境

◆キャンパスの立地条件

桐生キャンパスは、JR桐生駅より北北東2.2km離れた市街地北部の一級河川桐生川に面している。キャンパスは、県道（桐生田沼線）及び市道によって3つに分断されている。東は栃木県に接し、東西の山地の裾が桐生側に向かって落ち込む谷合盆地状の位置にあり、三方は小規模な山に囲まれ、敷地内には古くからの樹木が点在している緑豊かな環境であるが、敷地周辺は住宅、商業、小工場が多い。

◆敷地条件

桐生キャンパスは、敷地面積78,182㎡を有し、敷地内の高低差は1.0mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。地質構成は、表層から2m程度までが砂質粘性土であり、深層部は玉石混じりの砂礫層が分布しており、建物支持層として深さは5m程度である。敷地内の建物延べ床面積は、66,784㎡、建ぺい率22.86%、容積率85.42%となっている。都市計画上の用途地域は第1種住居地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。

(2) キャンパス整備の経緯

◆工学部

工学部は、機業都市・桐生に大正4年12月に染織産業のために設置された桐生高等染織学校を前身として、昭和24年に新制群馬大学の学部となったものである。設置時点では、色染化学、紡織、化学工業、機械、電気の5学科でスタートしたが、時代の変遷に対応すべく、改称及び名称変更が実施され、学科も徐々に増設され拡充されてきた。

その後、昭和39年、大学院の工学研究科（5専攻）が設置され、昭和54年には11学科51講座となったが、技術革新や学際的分野への対応、さらには、高度技術者養成の社会的要請に応えるべく、平成元年10月に次のような改組・再編を併せて実施した。

- ①大講座制への移行
- ②大学院後期課程（博士課程）の設置
- ③工業短期大学の廃止及び、夜間主コースの新設

この改組・再編により、11学科が7大学科、51講座が19大講座となった。

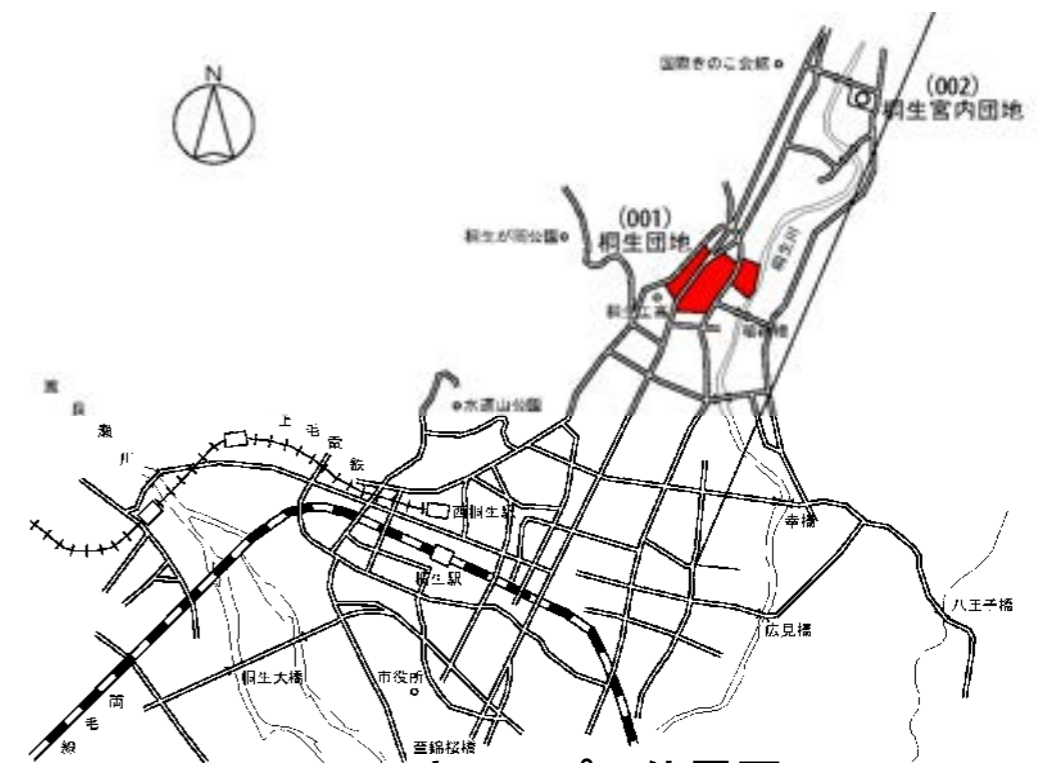
このことにより、従来のいわゆる隣接境界領域、あるいは分野の異なる領域との相互協力、学際的研究の活性化、柔軟性等が確保し易くなり、学部ひいては大学全体の組織上の運営条件が改善された。

さらに、平成19年、大学院を中心とした高度な教育・研究組織の構築のため、大幅な改組を行い、生産システム工学科が全国有数の工業都市である太田市に新設された。

工業系企業群に不可欠なものづくりの教育研究拠点ができたのである。



案内図



キャンパス位置図

5-3 桐生キャンパス

(3) 耐震・老朽状況

・耐震補強が必要な建物 (Is値=0.4以上0.7未満) は、図書館 (Is値=0.68)、教育用電子計算機棟 (Is値=0.55) 及び建設工学科棟 (Is値=0.65) の3棟であり、計画的な整備が必要である。

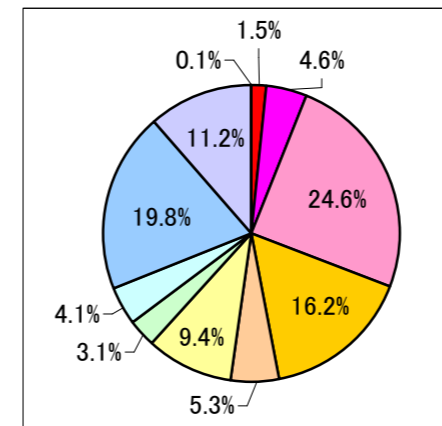
■ 経年別建物配置図



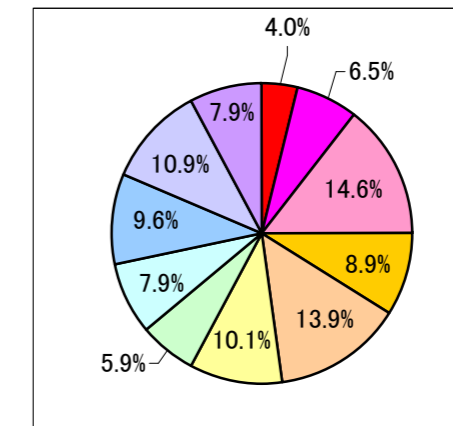
凡例

	耐震改修必要建物 Is値=0.4以上0.7未満 旧耐震 未改修建物 (建設年、昭56以前：1981以前)
	老朽建物 建設後25年以上経過、未改修建物 (建設年、昭60以前：1985以前)
	将来的整備必要建物 (今後12年程度) 建設後、20年以上25年未満経過 未改修建物 (建設年、昭61～平2：1986～1990)
	将来的整備必要建物 (今後12年程度) 建設後13年以上19年未満経過 未改修建物 (建設年、平3～平9：1991～1997)
	改修済建物及び改修予定なし建物

■ 経年別保有面積の割合



桐生地区



全国

経過年数	
	50年以上
	45～49年
	44～40年
	35～39年
	34～30年
	25～29年
	24～20年
	15～19年
	14～10年
	5～9年
	5年未満

・25年以上経過した建物の比率は61.7%となっており、全国平均57.9%と比べて高い割合であり、比較的古い建物が多いことがわかる。
 ・現状で経年25年以上の未改修建物は約10,409㎡であるが、今後12年間に11,584㎡が新たに経年25年超となり、随時、改修を計画する必要がある。

(4) 施設整備状況

・大学教育・研究施設のうち、工学部の整備率は86%であり、全国立大学の平均88.5%と比べて若干整備率が低い。
 ・図書館 (分館の整備率66.6%) ・体育施設等の整備率は107.2%と全国立大学の平均90.7%を超えている。
 ・支援施設の整備率は126.7%であり、全国立大学の平均117.9%を超えている。

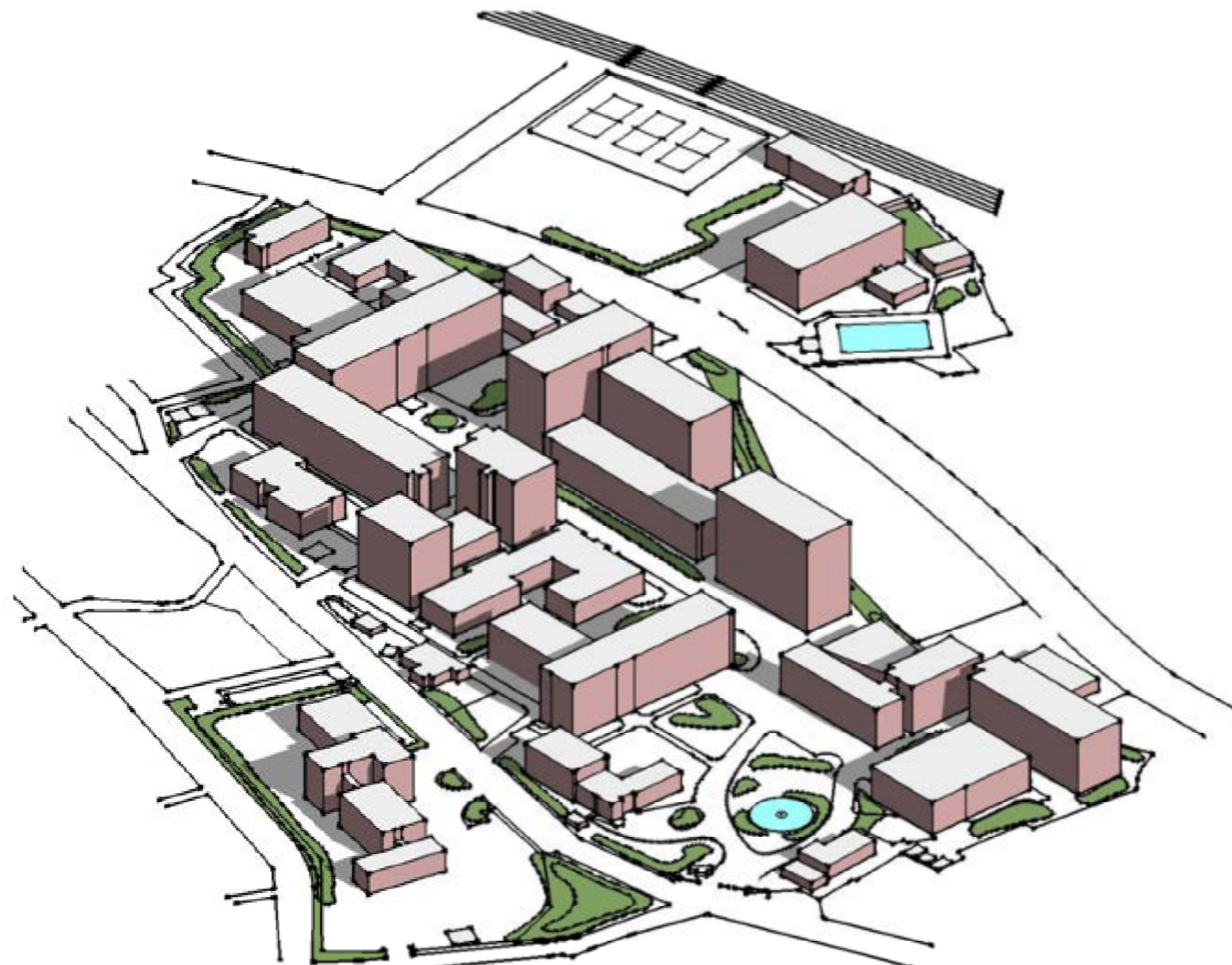
■ 面積区分毎の整備率

面積区分	大学教育・研究施設	図書館 (工学分館)	図書館・体育施設等(全学)	支援施設 (全学)
保有面積(㎡)	60,440	2,478	52,280	12,809
必要面積(㎡)	70,295	3,720	48,790	10,108
整備率 (%)	86.0%	66.6%	107.2%	126.7%
全国との比較	桐生: 86.0% 全国: 88.5%	本学: 66.6% 全国: 90.7%	本学: 107.2% 全国: 90.7%	本学: 126.7% 全国: 117.9%

5-3 桐生キャンパス

(5) 屋外環境整備

- ① 正門付近には、大正4年に建設された登録有形文化財の同窓記念会館が保存され、また由緒ある枝垂れ桜が植えられ、歴史と趣が感じられるキャンパス入り口となっている。しかしながら、桐生キャンパスは狭隘である上に2本の道路によりキャンパスが3分割されている。
- ② 4号館から3号館まで続く広場は歩行者のみの中央モールとし、中央キャンパス以外に主要な駐車場を2カ所設置して安全で快適なキャンパス空間が確保されている。なお、駐車場スペースが不足していることから、新たな駐車スペース確保等の検討が必要である。



同窓記念会館



守衛所

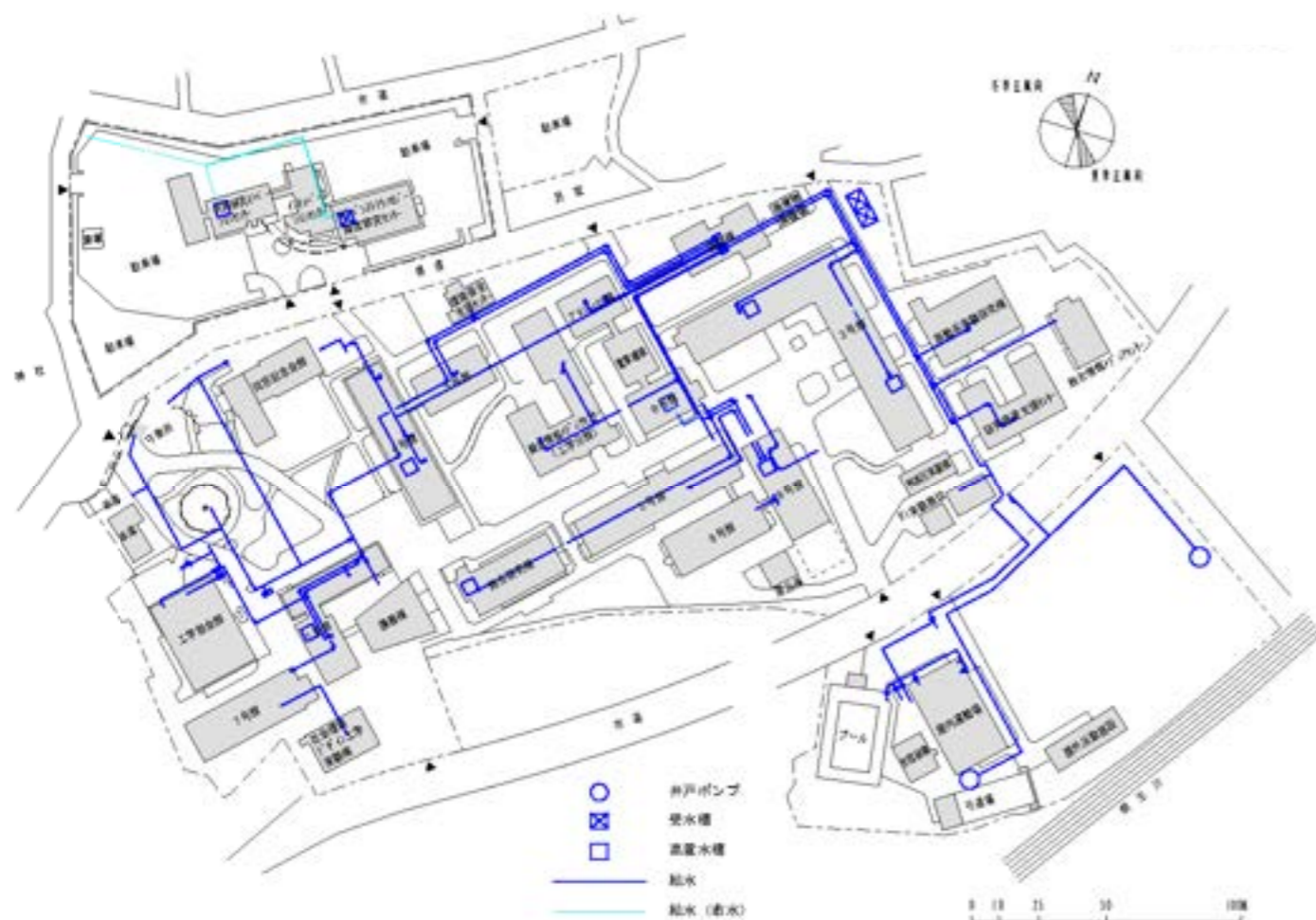


建物周辺駐車場

5-1 桐生キャンパス

(6) インフラ整備

■ 給水設備



■ 排水設備



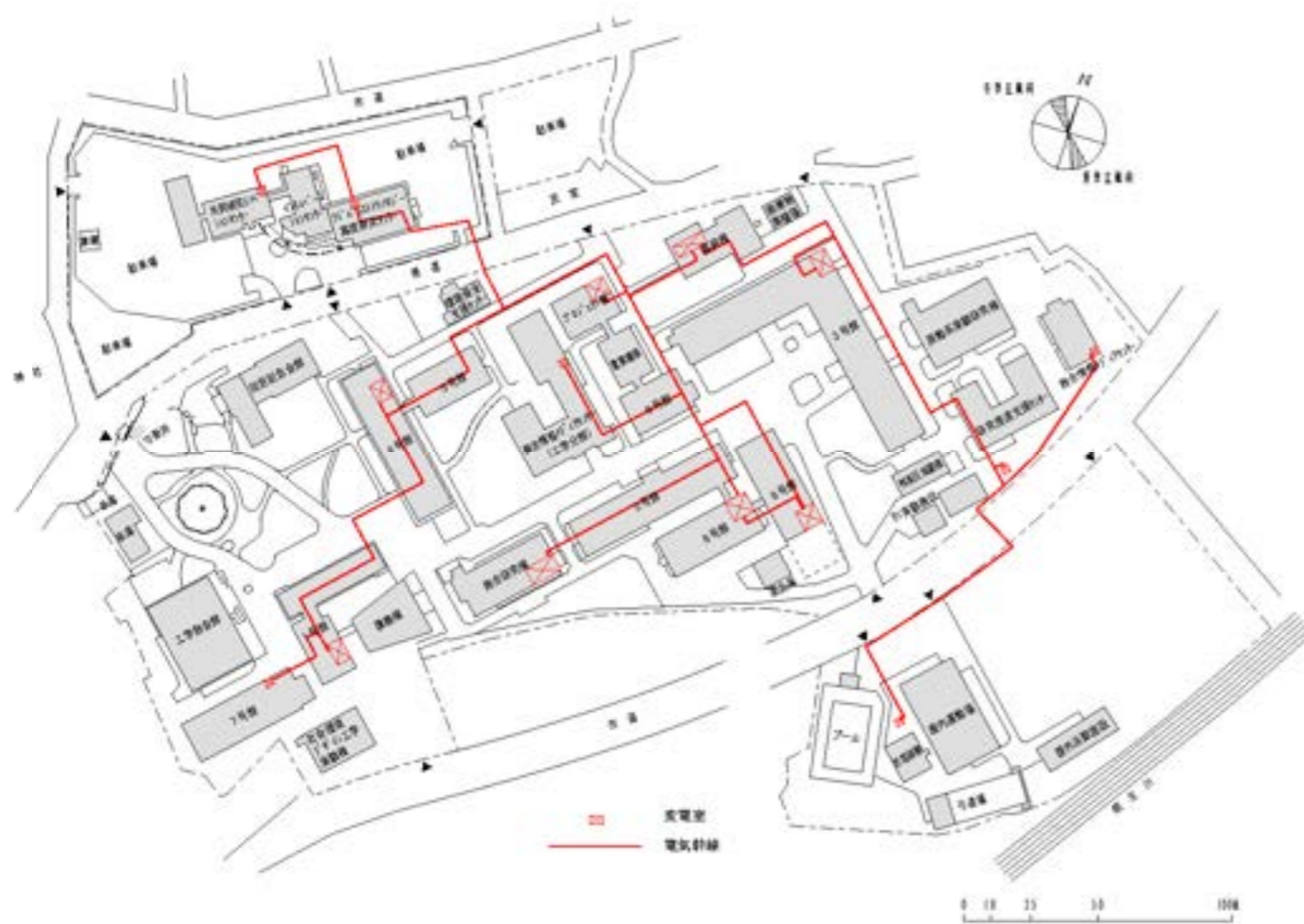
- ・桐生キャンパスにおいては、構内井戸2本の専用水道により給水全てを賄っている。現状では揚水量・水質共に特に支障はないが、井戸の枯渇・自然災害等への危機管理を考慮したバックアップ体制等の検討が必要である。
- ・平成21年度に井戸ポンプ及び埋設揚水管については更新済みであり、現状では特に問題はないが、経年劣化に対する計画的な更新が必要とされる。

- ・雨水・雑排水・汚水とも合流方式で全て公共下水道に接続されている。
- ・現状では特に問題は生じていないが、雨水に関しては環境配慮上出来るだけ敷地内で浸透処理させる方向で検討しており、透水性アスファルト等による駐車場整備を積極的に推進する。

5-1 桐生キャンパス

(6) インフラ整備

■ 電気設備



- ・引き込み受電室の高圧配電盤は、改修工事に合わせて更新して来たが、監視盤を含む基幹の部分は、昭和45年の基幹整備時に設置されたままであり、老朽化が進み更新が必要である。
- ・また受電点のGR付PAS（地絡継電装置付き交流負荷開閉器）は、平成3年に設置されたまま更新時期に達している。
- ・サブ電気室は、屋内電気室13カ所、屋外キュービクルが2カ所あり、図書館電気室、体育館の屋外キュービクルは老朽化が著しく更新が必要である。
- ・構内の高圧ケーブルには、老朽化した昭和40年代の物も存在しており更新が必要である。
- ・電話交換機設備については、平成5年製造で既に更新時期に達している。

■ 都市ガス設備



- ・都市ガスの埋設配管は、一部に老朽化した配管用炭素鋼鋼管（白）を使用しており、ライフラインの安全性を確保する観点から、計画的な更新の必要がある。

■ 空調設備

- ・平成18年度からボイラ設備による中央暖房方式を廃止して個別空調方式に切り替えを行った。
- ・8号館・材料工学科棟・総合研究棟・総合研究棟（2号館）の空調用ガス焚吸収式冷温水発生機は、経年劣化に対する空調方式を含めた計画的な更新が必要とされる。

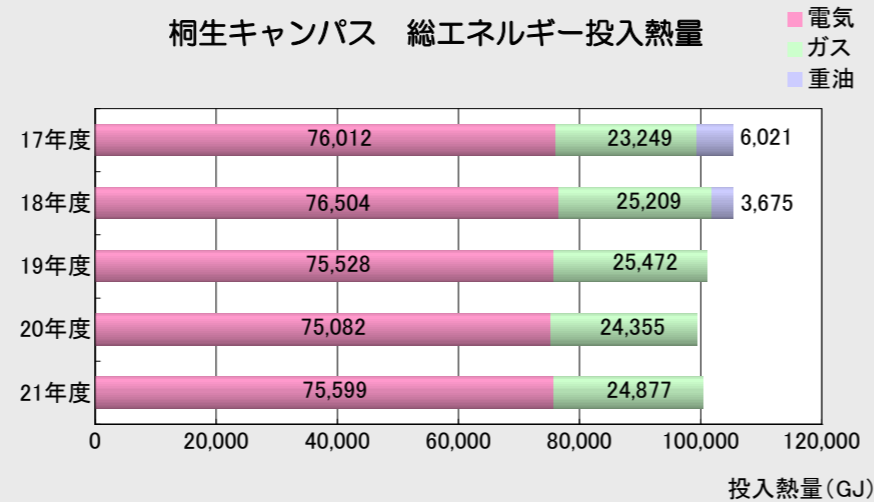
5-3 桐生キャンパス

(7) エネルギー使用量

◆総エネルギー投入量

桐生キャンパスにおける総エネルギー投入熱量(GJ)に関しては、平成18年度に廃止したボイラ設備の重油量を除いて平成19年度から平成21年度の3年間は、ほぼ横ばい状況である。

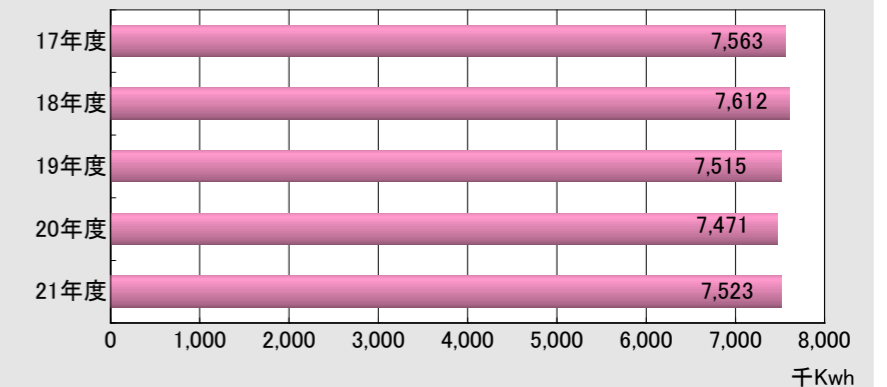
桐生キャンパス 総エネルギー投入熱量



◆電気使用量

桐生キャンパスにおける電気使用量に関しては、エネルギー使用量の「見える化」、省エネパトロール等の省エネルギー対策を推進しているが、平成18年度よりの建物改修等による省エネ機器への更新効果で使用量は、ほぼ横ばい状況である。

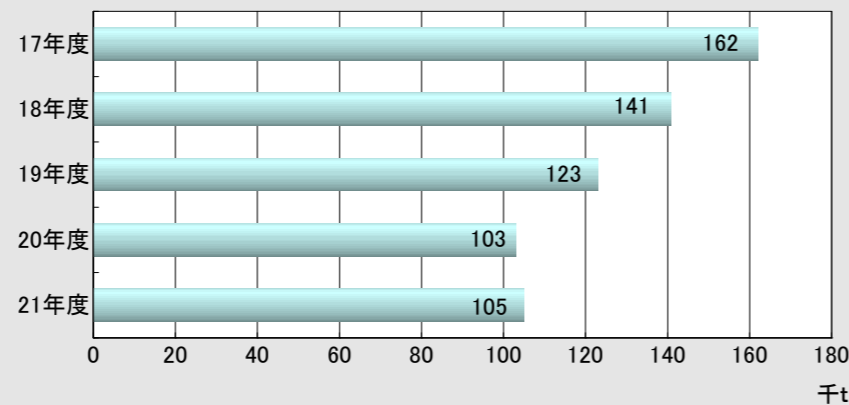
桐生キャンパス【電気】使用量



◆水資源使用量

群馬大学の3キャンパス（荒牧，昭和，桐生）は、主に地下水（井水）を使用し、太田キャンパスは、市水を使用している。
桐生キャンパスにおける水資源使用量に関しては、平成18年度ボイラ設備廃止に伴う補給水の縮減移行、平成20年度、平成21年度はほぼ横ばい状況である。

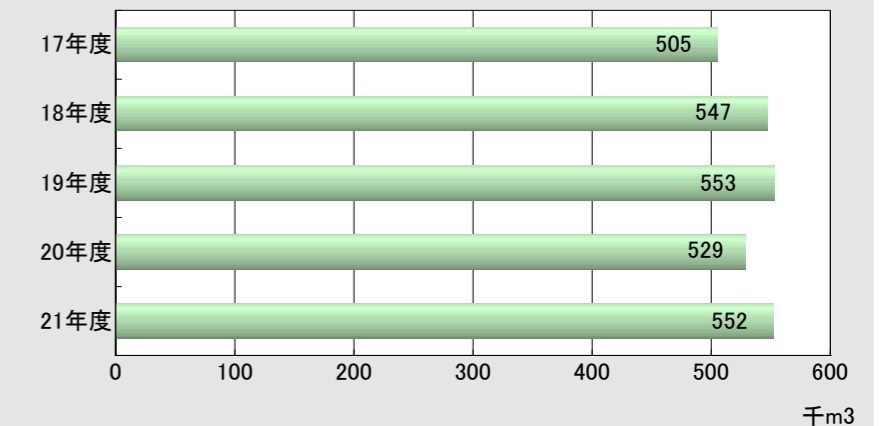
桐生キャンパス【水資源】使用量



◆ガス使用量

桐生キャンパスにおけるガス使用量に関しては、エネルギー使用量の「見える化」、省エネパトロール等の省エネルギー対策を推進しているが、都市ガス使用量はほぼ横ばい状況である。

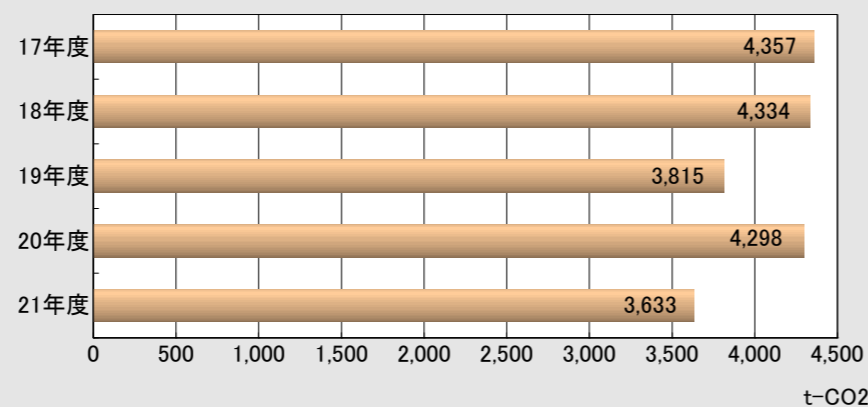
桐生キャンパス【ガス】使用量



◆二酸化炭素排出量

桐生キャンパスの二酸化炭素排出量に関し本学では、平成19年度に温室効果ガス排出抑制等のための実施計画を定めて削減に努めている。
平成19年度はボイラ設備廃止に伴い削減された。平成20年度は電力会社の原子力発電所停止による火力発電増加による電力排出係数の上昇に伴い増加した。

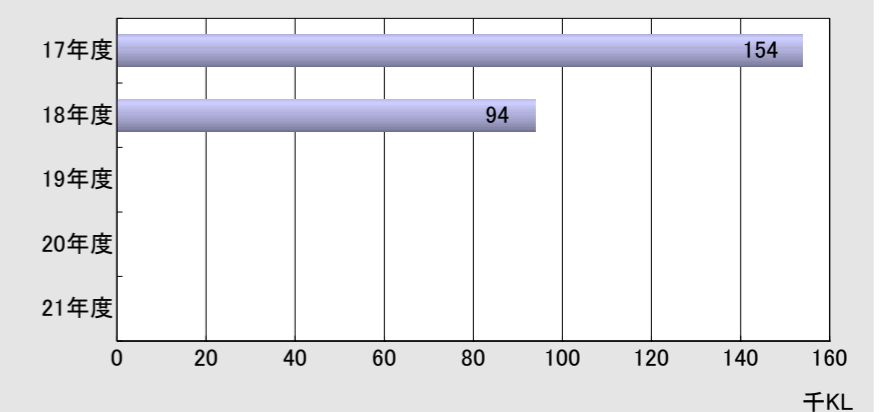
桐生キャンパス【二酸化炭素】排出量



◆重油

平成19年度からボイラ設備を廃止したため、桐生キャンパスでは重油使用量はゼロとなっている。

桐生キャンパス【重油】使用量

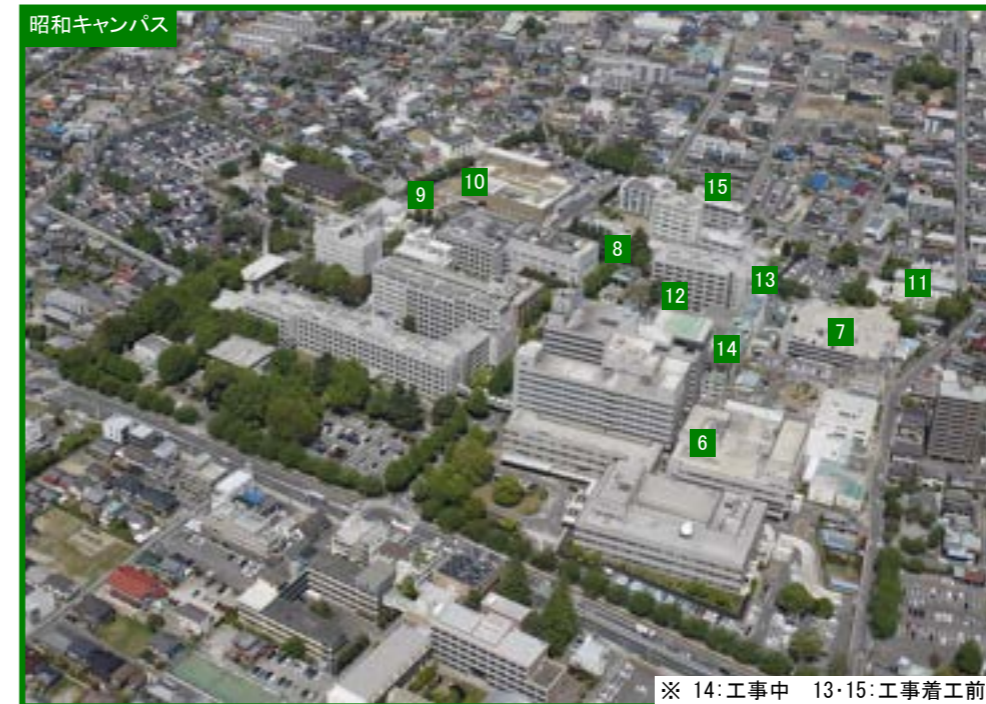


(1) 荒牧キャンパス, 昭和キャンパス



荒牧 キャン パス	1	教養教育GA棟改修 H19.03 (R5 4,100㎡)
	2	(教)A・B棟改修 H20.02 (R5 5,420㎡)
	3	(荒牧)図書館改修 H21.02 (R2 3,310㎡)
	4	(教)E・F棟改修 H21.02 (R3 2,520㎡)
	5	教養教育GC棟改修 H22.02 (R3 2,250㎡)

※ 5: 工事着工前



昭和 キャン パス	6	(医病)中央診療棟新営 H18.09 (R5-2 16,510㎡)
	7	(医病)立体駐車場新営 H18.03 (S3 8,090㎡)
	8	(昭和)保育所新営 H18.12 (R2 240㎡)
	9	(医病)特高受変電室新営 H20.01 (R1 530㎡)
	10	(医)重粒子線施設新営 H20.11 (R2-1 6,280㎡)
	11	(医病)看護婦宿舎改修 H20.03 (R6 2,010㎡)
	12	(医)臨床講堂改修 H21.02 (R2 1,280㎡)
	13	(医)医会棟改修 H21.10 (R5 1,620㎡)
	14	(医病)基幹環境整備 H21.10 (南北棟解体等)
	15	(医)保健学科中央棟改修 H22.09 (R5 2,680㎡)

※ 14: 工事中 13・15: 工事着工前

1 教養教育GA棟改修 (17補正 耐震・7スベスト)



3 (荒牧)図書館改修 (19補正 耐震・老朽)



6 (医病)中央診療棟新営 (15-16・16-17・17-18国債)



12 (医)臨床講堂(臨床大講堂) (19補正 耐震・老朽)



10 (医)重粒子線施設新営 (18-19・19-20国債)



2 (教)A・B棟改修 (18補正 耐震・老朽)



(荒牧)屋外環境整備(遊歩道) (新たな整備手法)



7 (医病)立体駐車場新営 (新たな整備手法)



13 (医)医会棟改修 (20補正 耐震・老朽)



8 (昭和)保育所新営 (新たな整備手法)



(2) 桐生キャンパス, 若宮キャンパス



桐生 キャン パス	16	(工)4号館改修 H18.02 (R6 5,140㎡)
	17	(工)5号館改修 H20.02 (R4 1,810㎡)
	18	(工)6号館改修 H20.02 (R7 2,230㎡)
	19	(工)講義室改修 H20.02 (R1 460㎡)
	20	(工)体育館耐震改修 H20.12 (S1 1,460㎡)
	21	(工)工学会館改修 H20.12 (R2 1,360㎡)
	22	(工)1号館改修 H22.02 (R5 3,370㎡)



若宮 キャン パス	23	(附小)西校舎改修 H21.08 (R3 880㎡)
	24	(附特)東校舎改修 H22.02 (R2 880㎡)
	25	(附小特)北校舎改修 H22.02 (R3 4,890㎡)
	26	附属学校基幹環境整備 H22.03 (渡廊下新営等)

21 (工)工学会館改修(19補正 耐震+新たな整備手法)



16 (工)4号館改修(16補正 耐震・老朽)



23 (附小)西校舎改修(20補正 耐震・老朽)



21 (工)工学会館(2階ラウンジ)



(工)太田キャンパス(新たな整備手法)



24 (附特)東校舎改修(2F特別教室)(新たな整備手法)



検討経緯

平成22年10月20日	役員連絡会
平成22年10月21日	第1回キャンパスマスタープラン策定会議
平成22年11月4日	施設・環境推進室
平成22年11月10日～	各部局教授会等
平成23年1月9日	施設・環境推進室
平成23年1月12日	役員連絡会
平成23年1月12日～	各部局教授会等
平成23年1月20日	第2回キャンパスマスタープラン策定会議
平成23年2月7日	施設・環境推進室
平成23年2月16日	役員連絡会
平成23年2月17日	第3回キャンパスマスタープラン策定会議
平成23年3月14日	役員会
平成23年3月15日	教育研究評議会
平成23年3月28日	経営協議会



国立大学法人群馬大学ロゴマーク 平成18年4月1日制定

群馬大学の英頭文字「G」をモチーフに緑と青で豊かな自然環境を示し、学生の成長と活躍をイメージして、新しい未来への創造と、社会へ貢献する大学の存在感を表現しています。



認証評価認定マーク 平成22年3月29日認定

独立行政法人大学評価・学位授与機構による平成21年度実施の大学機関別認証評価において、「本学は、大学設置基準をはじめ関係法令に適合し、大学評価・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている」と評価されました。

制作

群馬大学キャンパスマスタープラン策定会議

高田 邦昭	学 長
平塚 浩士	企画・教学担当理事
和泉 孝志	研究・国際交流担当理事
中島 節夫	総務・財務担当理事
石川 治	病院担当理事
竹内 利行	副学長
小池 啓一	教育学部長
富山 慶典	社会情報学部長
星野 洪郎	医学系研究科長
渡邊 秀臣	保健学科長
板橋 英之	工学系研究科長
小島 至	生体調節研究所長
末松 美知子	総合情報メディアセンター長

群馬大学施設・環境推進室

中島 節夫	理 事
田辺 秀明	教育学部
堀 正	社会情報学部
中田 吉郎	大学教育・学生支援機構
村上 博和	医学部
新井 雅隆	工学部
峰岸 敬	医学系研究科
山下 孝之	生体調節研究所
田村 遵一	医学部附属病院
齊藤 文男	施設運営部



ISO 14001 認証マーク 平成19年1月20日取得

中期計画においてISO14001の認証取得の方針が示され、教職員・学生が一体となって環境対策への取り組みを推進しており、荒牧キャンパスが環境マネジメントシステムの国際規格を取得しました。